その中

新潮社
返却

新聲記者編

わらの草

新聲社藏版

新聲記者編

わらの草

新聲社藏版

目次

富士の姿繪……小島烏水……一
旅のそら……佐野天聲……一五
春色……河井酔茗……二三
妹山……中村春雨……二五
夏の夢……すゞしろのや……四八
人影……生田葵山……五〇
無絃琴……山本露葉……五七

末の露……金子薫園……六一
夢……山田枯柳……六八
四疊半……永井荷風……七一
はつか鼠……兒玉花外……八六
梅花三十趣……鹿島櫻巷……九一
輕舸小人の記……田口掬汀……九九
繪師……栗島狹衣……一〇七
桃……高須梅溪……一一

わか草

富士の姿繪

烏水

げに下手の横好きは爭はれず、繪の具皿の中へ產み落されて、紺青の乳を吞たゝか飲みたるにてもあるまじさが、屏風に張交へたる再版ものゝ廣重の景色繪に、ぱんと魂をうちこみて、それからは菓子よりも先に鎧武者の繪本をねだり、頸から手の出る人形を手習草紙になすりし惡戲が嵩して、白菊の瓣に赤インクをさすオ覺、子供にしては出來過ぎた業なりと叱られて、手柄顏なりしころは、思はざりしな今のやうに、都の土を生柔かくて踏みこたへのなきものゝやうに言ひ做し、寫生の、モデルのと抹香臭い名をつけ、勿体なくも母上をいたぶりて旅費を拵へ、春の日永を行脚三昧に浮かれありくとは。

紙漉の小唄に耳を澄ませて、生ぬるき水溜りへ片足突こみ、はて何かポンチ繪の材料にと、飽くまでぬからぬ顏のわれ、一生のおもひ出に三國一の名山富士を描い

てくれむ、もとより狙仙の猿、岸駒の虎などと同し床に飾られて、雅人とか骨董家とか符諜のつく厄介者に、米の料を奉公してくれるほどの親切氣は微塵も持合さず、千萬人の爪彈きは、蚊の唸りほども耳に響かねど、只わが腹の蟲が縱に頭を振るほどの作を土產に持ち返らむと、いつもの木炭紙を畫盤に挾みて肩に懸け、5Bの鉛筆を一枚に一ダース削り捨つる覺悟にて、先づ東海道をと志しゝが、平塚の松原に一服やつて、南鄕の裏見富士、これは名所圖繪などにも見えて新しからず。馬入河を渡りかけて、軟かき沙の上を葡萄色に透き通りたる水の、玻璃を展べて流れ行く末は、相摸海に注ぎ　烏帽子岩に當つて碎けて水晶の珠や跳らむ、紫溟とろりと油のごとき見ゆ。振返れば岸を縫ふ小松原、蜿蜒として走れる上に、布團を拋げ出したやうに泛べるぞ大山なりける。玉くしげ箱根の山は、一段と高く聳えて、杳冥の天路を劃したる姿雄々しけれど、生憎雲めが中帶結ひめぐらして富士が見えず。見えたところが、いはゞ蒔繪にするまでの景色なりと　こゝも眼をねぶりて通り過ぎ、それより小田原城の殘濠に、つはもの共の夢の跡を弔ひ　箱根の山路へとさしかゝりて、蘆の湖水に舟を泛べ、虛空を踏みて立ちたまふ富士の御姿、玲瓏として珠より潔けきを、あらたふとやと舷を叩いて感に入りぬ。艫聲ゆるく水を亘りて、

揚雲雀の影落つるも長閑けし、舟存外に搖れて鉛筆持つ手定かならず、まゝよと圖取りの位置を胸の中に疊みこみて　船を舍つると逸早く、例の藁づと入りの赤腹（魚の名）を鬻げる茶店に躍りこみ、ハイ御免よといふ舌と、鉛筆持つ手と同時に動いて、輪廓に取かゝりしが、考へると富士が主か、湖水が客か、竹を添へて始めて虎を合點さすこと、拙き骨頂ぞかしと、これも首尾よく出來損ねて扯り棄てぬ。

それより姥子の温泉に逗留して　米味噌持參のお客さまと同室になり、將棋の手合せ一度も勝つたことなし、お前は江戸の衆ぢやな、このごろ東京では米がどれはどしますと切り掛けられて頭を搔き、われら美術イヤナニ繪師のことでござれば、相場などは一向に心得ませぬと刎ねつければ、繪をかゝれるか、それは善い藝を持てござるの、この間太郎どんの婆さまが、淺草の觀音さまに參詣をして、いろ〳〵の繪を孫のところへ買ふて戻られたが、どれも立派なものぢや、繪もあれくらゐ美くしく出來ると娛しみでござる、何かなお前もあれをやられるかな、併しあれで一枚一錢七厘は安いと、能く聞けば石版畫の話なゝに腹を抱へぬ。

かゝる罪なき話に日を暮らすうち　日頃の旅疲れが一時に肩に凝て、當分入浴と決めぬ。都は長堤何里の向島、花衣櫻かざして浮かるゝ遊屐の、さぞ煩はしきこと

ならむ。こちらは羽弱き蝶を路連れとして、木履突かけてのそゞろあるき、櫟の樹、朴の樹、栗の樹と木立隙間もなきほどなれど、こゝは箱根山中いと高きところとて、猶さながらの冬なれば、嫩き葉の芽みたるが珍らしきほどなり。うす暗き阪を超えるたびに、粘土に下駄を吸はれて、おもはず跣足になることもあり、大地獄をさまよへば、火事の燒跡のやうに、そこにもこゝにも、硫黄臭き白烟、亡者の褌を長く大地に曳きて、何やら性体の解らぬ樹の、黑く焦けたる骸骨にまとひぬること氣味惡し。そこを崖傳ひに危ふく下れば、炭燒く烟ほの〴〵と樹の間を洩れて、鶯の笹鳴き、人の世の聲にはあらず。右に仙石の湯場を視て、左は冠ヶ嶽・早雲山、いやが上に折り累なり、雲を衝くばかりの大菩薩、丈六の金身を露はして・螺髻高く旭に映れる麗らかさ、どうもいはれぬ。

仙石の牧場よりは、冬枯のまゝ頰を撫でるほどの丈長き萱芒を掻き分けて、爪先上りに乙女峠へとかゝる。この路は始めてにて、方角も辨へねど、參謀本部二十萬分一圖と、相摸風土記とは、頸ッ引の男なれば、初對面の心地はせず、先づ膝の關節にガクリと來るほどの愁嘆場もなくて、絶頂から三寸たけ、ぬッと頸を出せば。

あはれ富士よ、高く甲駿信飛の群山に抽んで、氣象おのづから雄なれど、他の峻

岳の羅漢の頭の兀げたる醜さには似で、いとも藹たけき御姿の、わが恋なる空想をもて喩へなば、木華咲耶姫を、そのまゝに化石しまつりたる即身の美術品、月おぼろに空に匂ひを罩めたる春の夜は、悠遠に大虛を渡り、長江に駕して、夢幻の世を知ろし召すかや、衛士の焚く火の晝は消えつゝ夜は燃ゆるなる戀のほむらを、この御山の雪にて冷すまいか、そはあまりに羅刹の惡世となるべし。乳に餓ゑたる子よ、血に渴したる親たちよ、この御山の金明水、銀明水を汲むときは、菩薩の悲願にかなふべし。菜畑裾をめぐりてその間に立ち交れる紅梅の飛び〴〵に色をつけたる眺めさへ捨てもえせぬに、一帶の小川、千畦の席田、白蟻の這ふやうに見えたる御殿場の停車場をはじめとして、小兒の髪の毛ほどちよんぼり茂れる鎭守の森など、一眸に見通しの大パノラマ、倏ち生れもつかぬ嘔となりて今來し路を瞰下せば、折疊める山々の底に磨き出すや一面蘆湖の明鏡、羽衣あらばこの春風を斜に受けて飛んで行きたし。

今は人栖まねど、夏は澁茶のあとで心天の御馳走は定なるべしとおもはるゝ、空茶屋に腰うちかけしが、富士のよく仰めぬがもどかしく、又も今まで佇みたる芝原に腰を据ゑて、手は早速畫盤に觸れ、かしこよりや初めむ、こゝを圖に取らむと、

熟く考ふれど、凡夫の悲しさ、魂は平等無限の淨境に游ひたれど、腦味噌少く、腕つたなく、眼曇りて煎じ詰むれば差別有限、元の人間に逆戻りしたるは無念千萬と、瞳を据ゑ、丹田を鎭めて筆を揮ふに、盡天地一切のうるさきこと、剝ぐごとく次第に身を離れて、身はこれ假空の人なり、富士はこれ幻象の山なり、何とはなしに熱海の蒸風呂に横臥して、湯氣を喰ひたるときのやうに、心地すがすがしくなりてよりは、曲れる一線川となりて流れ、草と伏したる一劃我ながらよく働きたりとおもふも暫し、それさへ忘れたるとき、耳元を掠めてブン〳〵と、力弱く鳴る羽蟲の音の外には、天つ香に匂ふわが吐息のげに寂びしきかな。

と氣の注いたるときは、魔の障したるとき、母(カ)あさんと呼ぶらしき聲、途切れ〳〵に鼓膜に響きて、頭は搔き亂されたり、邪魔立ひろくなと振向いたるとき、渦く利根の流れを横きりて、張絹を裂くらむ子規の聲もかくや、『こえて遇ひたいお母さんに』

ナニ母に遇ひたいと、少しは里心起りたる我の、おもはず釣り込まれて首を拉り、はて誰か知らむと思ひに沈むとき、若草を踏みて去と〳〵と、わが背を向けたる今の上り口より喘き來る唄のぬしや誰。

と見れば爺を先に立て、跟き來りたるはそが孫娘なるべし、年は十三四の、古き喩へながら花なれば莟みの唇、羽二重にて漉したるやうに透き通れるうす皮の色白を、笠に包みてくけ紐の深紅に隈取り、白地の手拭を大人らしく帶に挾み、桃色甲斐絹の未だ新らしき脚絆に、さまで汚れぬ足袋を穿きて、指先重たき草鞋いた〳〵しく、『野こえ、谷こえ、あの山こえて、こえて遇ひたいお母(カ)さんに』と一節艶やかに、されど何處となくうら淋びしく、謠ひたりしが、我を見て耻かし氣に顔を反け、こゝらで一寸一服やりたげなる爺の背を、白魚のやうなる指先にて一寸つき、何やら呟きて、わが描きかけたる畫を眺と見惚れて、鬢の毛一筋動かさゞりしその眼は、月の雫の凝りたる上に、黑漆一點涼しとも愛らしとも言はむやうなかりしが、又我と顔見合せて、愈よ決まり惡し氣に刻み足になり、下り阪へとかゝるが早いか、白き笠は流れ去りぬ。

あッたら暇潰しと呟きて、やをら筆を把り直しゝはよけれど、何となく前のやうには捗取らず、それにしても今の乙女、もの腰から褄外れまで、ぶしつけなる田舍娘にあらず、『こえて遇ひたい、お母さんに』とは、母に先立たれて、その遺骨をぞこぞの寺へでも收めたる歸り路か、たゞしは何か仔細ありて、遠方に隔たり居る母

御を慕へるにやあらむ、されどあの道者姿は、母の罪亡ぼしといふやうな譯からして、靈場巡りかも知れず、それとも只の流行謠を唄ひたるまでにて、乙女の身の上に、さる混み入りたる事情あるにはあらざるべきかと、乙女の身の上いぢらしく、氣遣はしく、はかなき妄想に驅られて、手の働き方少々胡亂になりしに心つき、不圖畫面を見れば、富士の頭にプラス女の顏、ヤア失策つた。

富士と乙女峠、乙女峠に立てる少女と少女の慕へる母、磁石と鐵にはあらねども、その間に引力あるらしく、姥子の宿より毎日のやうに散歩がてら、峠へ上りて富士に對ふたびに、かの乙女を想ひ起さぬことはなく、宿に戻りて畫盤を瞻つむるに、どうやら輾軸搖かぬ富士の御山の綿帽子を剝げば、玲瓏たる乙女の石像現はれはせずやと危まる。ヱ、我ながら不甲斐なしと暗室に行燈も點けず、寂寞として跌座したれど、おろかや繪の具いぢりの小兒何の行力ある、富士の白雪厚くはあれど、乙女の姿に比ふれば、紅梅の前にうす絹を張りたるよりはかなくて、匂ひゆかしき花のぬしを、搔き消すに由なし。我元來陌頭の柳に眼も觸らねば、いかなる艶色も妻と呼ばれて戀衣、縫はすべしとはおもひも寄らず、美の神は妬みの神とぞ承はる、一身を献けて、神の御門に膝つき、御稜威かしこきおん姿繪を摸しまゐらせて、朝

夕渴仰せまくおもふ心は筆尖に凝り固まりて、天地を射透す征箭の鋭きに似たるを誇りたりし。されば源氏五十四帖、卷々の女ぞゝ搖き出して、左右に侍り、『こちら向いたがよいわいの』といふやうなことを聞かせられたりとて、膝立直すはおろかなこと、矜羯羅童子と制多伽童子と、左右の手を引いて、明王の御召なるぞよと敦圍たればとて、盤石不動、鼻ッ先に笑ふてくれべかりしを、喝、この凡骨め、多寡が鄙しい田舍娘を買ひ冠り、おのづと頭を俛れたる不見識にて、清淨潔白廣漢の素娥を了鬟に召し仕ひたまふ富士の女神をうつすには、猶千年も万年も修行が要るは。

鄙しき田舍娘とや、問ひまをさく、牡丹はいかなれば富貴にして、蓮は何ゆゑに貧賤なるか、美くしきものは誰が見ても美くしきに相違なし、人間の區別と階級とが、應用さるべき範圍は、躰(がら)の大小によりて曹捌かるべき蘿蔔(だいこ)より以下に限られたり、苟めにも繪たくみに向ひて八百屋主義を說きたまふこそ心得ね、無邪氣は神と小兒之をよくす、かの乙女の髮の端より、爪先に至るまで皆愛に充ち滿ちて見ゆれども、狎る可らず、犯す可らざるものあるは、その無邪氣なるだけ、却て神々しきところあるためにあらずや、富士山に乙女峠は、地にありて麗はしきもの丶一對なり。乙女と、おそらくは乙女の母とは、人にありて又美しきもの丶一雙ならむ。我

はこの間に、眼に見えぬ絲ありて、迭に牽きつゝあるを信ずると共に、その絲を手繰り寄せ得るものは、詩人にあらずは畫工を措いて他にあるべしともおもはれず。想ひ起すは、さる外國人の我に語りけるやう、むかし瑞士に畫工あり、さる少女と契りぬ、少女見えずなりけるとき、蓮葉に似たる山一夜にして築かれぬ、畫工はこの山を少女の權化とおもひ、丹誠を籠めて描きぬ、かくて畫は成りたれど、戀を失ひたる哀しみに堪へで瘦死しぬ、里人世にも憫れなることにおもひ、その山より獲たる花崗石にて墓を築きたり、今頃その墓に詣つる人は、勿忘草（フォルゲット、ミー、ノット）のしほらしく咲き出でたるを忘られぬなるべしと。それは戀、我はさる浮きたるとに身を窶せるにはあらねども、富士とて乙女とは淺からぬ因緣ありとおもはれて、止むに止まれぬ因果同士、いかで描かでやは。とこはわが室内の自問自答なり。

繪絹をはじめ一切の道具を小包にて取寄せて、今まで親しかりし合宿の田舍客をうるさがり、亭主を談じつけて離れの座敷を一間借り受け、閉ち籠るやうになりても、先づ思ひ泛ふは乙女峠の景色、笠を背に投げかけて、兩足を芝生に投げ出したる乙女の、眩ゆき朝日に彩られたる八朶の芙蓉を視つめたるさま、いづれかといへば、この頃修行の水彩畫よりも、性來日本畫に得意なる我のことゝて、このたびは

拙くもあらず描かれたりしが、坊間に有り觸れたる富士見西行を、小娘で行くやうな意匠ありがたからず、とこれも裂き捨て、その次は眉黛より濃き三保の松原を、この娘の車牛の大なるに置蒲團して、黄の鼻綱に引かせながら、振返りて富士を仰ぐさま、見惚るゝばかりに麗はしかりしが、四五日經て改めて見參するに、業平の東下りを換骨脱胎と、惡口も測りかねまじき出來榮ゑに泣きたくなりぬ。ヱ、儘よ、元の志は富士にありしものをと、松も牛も乙女も墨タップリに搔き消して、惡龍天矯、躍つて雲を喚び、稻妻のうしろを駈けぬける勢ひに、描いたりや一氣呵成の富士の山、離れて見ればしどけなき惡態に愛想つき、富士は到底わが手に合はず、無理に描かば富士を大俗に墮しやる吾腕うらめし。

迷ひ次手にこのたびは、乙女の姿をこそ。娘西行、女業平が似合はしからずば、我に詮術ありと、あの顏立をそのまゝに、笠を剝き取り、房々としたる黑髮を、桃色のリボンに結ひてうしろへ投げ、海老茶色の袴を穿いたるが、白堊の花に燃ゆる唇を接けて佇めるを描き、その次は五衣うち襲ねたる女鶺となりて、寢覺の御簾に雪のやうなる梨花の、はら〳〵と散りかゝるを見そなはすところを、魂こめて描いたりしが、姚黄魏紫は天品を作す所以にあらず、こんなものは雜誌の口繪が相應な

りと、これだけはさすがに捨てもやらで、例の田舍客にくれてやりぬ。

あぐみ果てたる長逗留も、畫の成らざる口惜しさに、今まで忍びてこの山中に籠りてゐたれ、山櫻しづ心なく散りての後は、驚も老いにけらしな、未だ暦の上からは五月雨の季節ともならぬに、この五六日は雨しと〳〵と降り出で、笹の葉裏に蝸牛の宙返りを、慰みとするやうになりては、旅もおもしろからず。さすがの我慢男、明日は忽々行李を整へて、富士とは一生のお訣れなりと、碌に飯も喰べずに思案の腕組、いつ果つべくもあらずして。けふも黄昏近くなりぬ。鬱陶しさに堪へねば、雨の小止みを幸ひに、庭下駄突かけて、うちの木戸を開け放しに、小石交りの磧を傳ひ、雜木こんもり茂れる岡へ上れば、こゝは船見峠とて、蘆の湖を眼下に瞰下す、あやしき雲扯れて飛ふこと早く、力なき薄日さへ洩れ出てたれば、富士の高嶺は明磐の文字を染めたらんやうに、ぽッかりと湖上に泛びぬ。藁屋より立昇る煙は、返魂香を焚けるにやあらむずらむと、女々しくも明日の別れがつらくなりて、白眼に觀すれば、月ある天が恨めしく、雪ある山が恨めしく、筆ある人が更に恨めしく、嗔恚の焔胸を焦がして、耳の根いたく熱するとき。

『野こえ、谷こえ、あの山こえて、こえて遇ひたいお母さんに』といつもの優さし

き聲、ヤと立上るとき、白の上衣のレースに潜む普賢菩薩の、雪より清き御肌に、乙女は霹と抱きつきてそこにあり、菩薩は情の泉たぎり落つらむ眼涼しく、乙女を搔き寄せて接吻しぬ。『母あちやんはこゝにゐますよ』と言ひたるやうに聞えたるは、人間の僻める心からにや。

さては母御にて在はしますよと、我を忘れて駈け寄らむとすれば、菩薩は翹のやうなる白きうすものを、下界杳けく投げかけて、風の絲の草を這ひ、松原を撫で、湖水を亘るごとく見えしが、その幾千筋の絲は、たゝめく間に白雲となりて、乙女がゐくぼを包み、菩薩の慈顏をかくしぬ。グラ〳〵と眼眩み、阪の上に俯伏したりとおぼえて、やうやく頭を擡ぐれば、神代ながらの富士の山、端然として天の一方に立たせたまふ、晴日之を晒して溶けず、膏雨之を潤ほして汚れず、金剛不壞の尊像に、何をあくがるゝぞ、人の子よ。

それより幾十日の後なりけむ、我は山中より大縑を齎らし返りぬ。その何物たるかは秘めて人に語らざりしが、いづこよりか聞き傳へけむ、友のなにがし、くれがし、うるさきまでに訪ね來て、行李退治にかゝられ、わが繪は滿座の中に引き出されぬ。かゝるときは、いつも仔細らしく首を傾くる癖ある友の、こは時事の諷刺畫

なるべしと勿体振りていへば、否理想畫なるべし、あらず何かの經に基きたる佛畫なるべしなど小雀のかしましくさゞめき合ふ。詩人はいひぬ、夢の譫言を筆記したる文の、句を成さざるやうに、これも夢中に見たる幻像を寫して朦朧に失ひたるなるべし、不具にても親の懷中より放しがたきは、かゝる因果の子にこそあれと、平生批評家をもて人にも許され、自らも任じたる某は、うろおぼえの審美學を、怪しき熟詁入りにて半時ばかり講述したる末に、『要するにこの繪は、美術の眞諦に背くこと大なり矣』といふ斷案を下したりき。それも可し、是も惡しからず、人さま〳〵の口賢こさ、智惠の木の實は油濃きものにこそあれ。

澧水橋西小路斜。日高猶未到君家。　雍陶

村園門巷多相似。處々春風枳殼花。

旅のそら　天聲

なまよみの甲斐國。黑駒の里の村端に於て、我は今三阪峠の頂より道伴となりける曆深く愛嬌ある若き女が岐路を彼方ざまに、杉松欅など生繁りたる小さき丘の出鼻を曲りて、艶めきたる衣服の裳裾高く褰げ　白き脚袢に白足袋草鞋の打扮せる姿の突とばかり消えゆきし方を眺めやりつゝ、何とはなしに物傷げなる心地のせられて、暫しが程を去りも得せで彳みつゝ居たり。

祝てふ小村を過ぎ、鹽山を越えて松里に歸るなりと、先の程我の問ひたるに答へたれば知りつ。什麼なる人の娘か妻か、いと世馴れたるさまの、もとより高尚とにはあらねど、又さまでに卑賤とにもあらず。歳頃は廿二三、髪黑く、眼鼻立醜からず。手織木綿の羽織に唐棧の綿入着て、帶は更紗とメレンスの畫夜とやらんいふなるべし、きり〳〵と結びて甲斐々々しき風情の旅馴れしは、かゝる山國に人となればなるべし、健脚ならぬ我今日三阪の峠四里の嶮を越え吉田より川口までは二里餘り、是より甲府まで石和を過ぎて三里には强かるべき道を、さのみ勞れたりとも覺えで恁う歩まるゝは、實に彼女がたまものともいふべく、さなゞなる珍き此國の風俗、

名所、舊跡、さては人物などを耳にして、思はずも歩みの進みたるものをなど憶ひやりつゝ、後邊に遠く隔りし三阪峠の日に背きて淡無色せるを望み、さすかたの御嶽あたり、奥仙丈が岳の雲をくづしてそばだてる姿の勇偉きを遙かにながめて、我は尚、黑駒の村はづれに立ちつくしたりしか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

道に疲勞たれば石和より馬車に乘りて、甲府の町なる只ある旅宿に、草鞋の紐解きすてつるは、家々の檐端に灯の光ともばゆく、往來の人も黄昏のいと遽げに歩みを運び、物賣る商人の聲淋しげに聞き做さるゝ頃なりけるが、夕飯したゝめて、一風呂さつと今日の疲れを垢と共に洗ひ流じ、汗と共に洗ひ清めたればやゝ寛ぎて心地好く、下女が舒べ捨てゝ行きし蒲團の上に横はり、旅日記いだして認め、三阪富士の美しかりし姿など心に描き浮べて、歌もがな、俳句もがなと頰杖つくく、枯れた腸あながちに絞りて、あはれ鬼神をもなど思ひつゝある程、障子越しに小刻みなる足音はた〳〵と聞えて、お客様、揉ましてくださいませんか、お客様と、優く細き聲をさきに、するすると開きたる障子の、間より半面を表方に差出せるは、歳の頃十三四とか打見やらるゝ女按摩なり。

幼ければさだめて力はなかるべけれど、疲勞慰めんには事足りぬべし。足と腰とをのみ頼むべきか。此方に來よ。揉みて貰ふべしとて呼び入れたる、兩の眼ひたと盲ひたりと覺しくかゝぐり〳〵足元覺束なく近うなりしを倩々と視つむれば、髪は銀杏返、着たるものは手織木綿の布子なり、縒たる帶に四季施したる半纏をばまとひたる、前垂のみは古からぬ唐縮緬の地は紫に大形なる亂菊を白く抜きしが際立しをば締て居たり。

名は何ぞ、歳は何歳ぞ。母やある父やあると糺せば、名は竹と呼びて今年十四なり。父母共に早く亡せて、今は只姉の婿取れるが頼りのみと答ふ。家は何處ぞと問へば姉は今、東郡なる松里といふに、煙草屋の店出しつゝ暮らすなり。されど生れ故郷は祝なりと語る。

祝とや、松里とや、と我は思ひ當れる節あれば、かさねて訊くに然なりと點頭きてやゝ涙ぐみしさまなり。

眼こそ盲ひたれば較ぶべうなけれど、口元、脣、鼻のあたり、殊にはかの頰の靨其儘なるはいとあやしくも似たるもの哉。

彼靨深かりし女も祝より松里に歸るなりと語れりしものを、妹ありて此里に在りぞ

とは、聞き漏しぬれど其れにはあらぬか、さならんには〳〵と思ひつゝも尙、幾歳の時眼をば盲せし、生れながらにか、痘瘡にても患ひてにかと訊けば、否々と掉頭ふりて、五歳の時眼を病みたるが原因にて、左は聊ばかり見えますれど、右は日の光さへ見えませぬと言ふ。さらば父母に別れて後、姉の許に養はれて、苛きことはなかりしか、姉婿は優き人か、祝には粧成はなきかと再び問へば、祝には親類はなにもなし、姉樣はやさしき人なれど、今度の姉婿樣は可優くはありませぬと、聲やゝ顫はしつゝいふ。今度とは、嚮にも姉樣は婿とりしにや。否々、嫁に適たので御ざります。嫁にとか。はい。さらば如何にして離縁せし。如何いふ譯やら私は知りませねど、何でも今の兄樣と情交とかゞありまして、前の兄樣から、離縁されたといふことを聞きましたばかり、其他には知りませぬと語る。

油あれども火蓋黑き洋燈の光は、懶氣にさゝやかなる銀杏返の右左に搖めくを照らして、力籠めつゝ採む小さき影の微かに疊の上に、ぼんやりと落ちしが哀れ深く見やられ、不覺に嚮に黑駒にて袂を別ちし、靨深き女の姿おもひうかぶれば、胸の裏なにとなく穩かならぬ樣の心地になりゆき、色は淺黑かりしかど眸にいふべからぬ愛嬌あり、眉いと濃さに、口元のよく締りしさま、殊には彼兩頰の靨の人目惹きて

丘の出鼻を廻りつゝ、消えつる影を見送り〳〵、何といふともなく、我心に淋しさを感じたるより推諒るに、縱しや此と彼と因緣なく、這哀れなる小按摩と、那靨深き女と同胞にはあらずとも、嚮には我彼女と別れて淋さを覺えぬ。今はまた這旨者に足腰を揉ましつ、开が身の上を聽きて涙なき能はず、語るものは兩人、聽く者は我只一人、而も同日に同國に、縱ひ東と西に引分れつゝ、彼女は今夜祝に、我は今這宿に横はりつゝあればとて、一筋の何ものか开處に、我と彼等との爲に結び着けられし糸の如く、緯經にはた上下に引纏ひたる蜘蛛の糸の樣なる、果敢なけれども捨てがたく、觸れなば自らなる響音の此鼓膜を打ちもすべく亂しもすべき或ものゝ、眼には見えねど何處にか潜むにはあらずやと樣なる疑に掩はれつゝ、眼を閉づれば彼女の靨まざ〳〵と現はれ、眼を開けば悄然と約しく座りたる小さき旨者の、只管に我勞を解かんとするがあはれなり。

あゝ嚮には三阪の嶮に、彼靨深き女の爲に勞を忘れ、今は膝中の逆旅に寢ねて、此の旨女に勞を解かる、因緣なくてやは彼と是とはた我とも、あなた此方におもひを暫時めぐらす程、いつか右も左も揉み果したりと見え、お粗末さまと挨拶して、しとやかに頭をさげて辭儀したり。

代は幾何ぞと問へば貳錢なりといふ。あまりに安直ければ誤聴かと訊正せしかど、矢張二錢なりと答ふ。如何なる故ぞと糺せば、歳弱くて伎倆鈍ければ、其料に等差あり、十錢前後より上下にて二錢なるまで、種々なるが中に、おのれは、上下揉みて未だ僅に四錢なりといふ。さらば上と下の代とらすべし、色々のと聞きたるがうへ、能く揉みて吳れたればと、二錢銅貨二個握らすれば、是にては多しとて否むを、多くとも納ておくべし、其れ許りのもの辭退するとかはと強てとらせ、夥度禮して出でたる障子の外に、次の部屋より漏れ來る灯の光映して、小さなる影法師の次第に消えつゝ、階段降り行く跫音はたく〳〵と聞えしと思へば、階下なる主婦に何どとか聲懸け、門の戸外開けて外の面にいで、からころといふ下駄の音の、大路の小石を嚙むまでが耳に入りて、臥轉一つすれば、四辻の邊りをや曲る、哀れに冴えたる笛の音の、突とばかり聞えて聽て消えたる。旅なりとも腰纏の備へだに豊かなりせば、今夜は早や稼がずとも歸らるべき程の阿堵物與へて遣るべきに、其れも心に任せねば是非なし。消えたりと思ひし笛の音は、微かなれど再び響きを夜風に乘せて、浮ぶが如くはた潜むが如く、高く低く縷の樣に續くが如く聞傚されたる。さても什麼なる情をか漏らさんとはすらん。

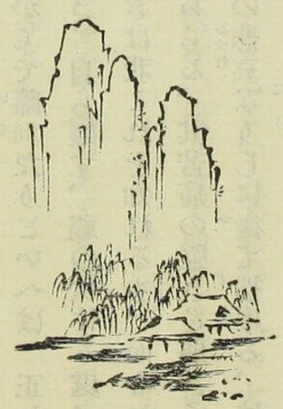
彼が姉は現今松里に在るなり。其姉は素直なれど夫姉婿は正からず。されど正からぬ人に嫁ぎたる姉は、曩に適きたりし家を正しからで離別たりといへば、正からぬ人に嫁ぎしも　彼に出でゝ是にいでず。自ら招きて自ら釀す、禍の伏する處、おのづから因あり果あり、應と報と環の如く然るべきは我これを知れるも、而もかの可憐の盲女、彼に罪なくして正からぬ者の爲に苦めらる、其苦痛の强きと弱きと、我得て知るべきの限りにはあらねど、語りて其語の悲哀なりしに徵て揣摩る、はかるところ多く違はずんば、家に歸りて樂きところなく、這處に在りて喜ばしきところなかるべきは、理の見やすく解易きなり。あゝ憐むべき盲女よ。汝は今何處をか辿る。笛の音もはやきこえずなりぬ。夜はいと更けたり、大路小路に往來ふ人の跫音も途絶えぬ。

眠らんと欲するに眠る能はず、朦朧として眼中なにものか宿れるが如き心地堪ふべからず。輾轉反側。彼をおもひこれをおもひ、鷄聲耳に入りて漸く華胥國の人となりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌る日われは御嶽に遊びて、山水の奇を弄びぬ。斯くて富士川の下り舟に搭じて、故郷に歸りつるは、甲府に泊したる日より儚へて三日、田斐がねの雲に袂を別ち、沼久保の渡頭にたちて、すゞろに嚮の夜の盲女の俤を思ひ浮べつゝ、去來の波浪心なく兩岸の草木永久に青きを眺めやりて、徘徊躊躇去るに忍びざりしは、明治戊戌五月十三日の夕暮がた、富士の頂黄色に染まりて、舟子が欸乃水煙と共に消えゆき、淋さ送る山寺の鐘六ッばかり、河風のおもてを吹きて肌寒かりし頃なりける。

灌佛やめでたき事に寺まゐり　支考
蛤や三日の月吐くけふの海　由平
鶯に手もとやすめん流しもと　智月
追々に來る人ごとのさくら哉　その



春色

醉茗

花

すのこの下のを暗くて
はるの光もさゝなくに
風やかよひてひと本の
かよわき草に花咲きぬ
花にも夢のあらんには
野末のすみれれんげ草
樂しき友をおもひねの
萎れし色は見ゆべきに

山

山の名に負ふ妹と背の
なかをへだつる吉野河
散りくる花を浮べては
いづこの里に流れゆく
水と花とのしたしみは
春くる毎にまされども
思ひありげにいつ迄も
わかれて立てり妹背山

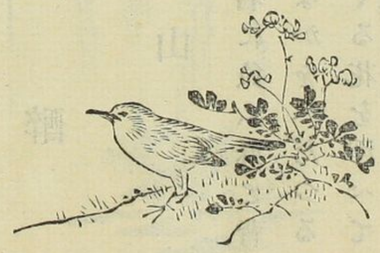
月

遠き神代にはしきやし
清き未通女のありけるが
冴し光におもはゆく
吾背の許をとひかねて
こひの恨にはてしより
末の世までも春の夜の
月はおぼろとなりにけり

心

かすみと靡き水とゆく
春のこゝろは深けれど
八重に一重に亂れても

句を知らぬ椿あり
さくらと馨り梅と咲く
春のこゝろは廣けれど
若菜摘みゆく野の末に
苔をもたぬ小草あり



妹山

（一）

『蛇に嚙まれちゃ大變だからね、氣を附けてお行でなさいよね、ね、清ちゃん、椀白をして兄さんを困らせちゃいけませんよ』

門口まで送り出でゝ、垣根に片手を添へて嫋嫋とした姿を支へ、美輪は優しい、而も張のある聲音で云つた、今洗立の色艶の好い丈なす黒髪が、房々と流るゝやうに肩頭へ蔽ひかゝつて、一際目立つ細面の色白の、ぽつとり紅に熱つた頰邊の何處にか引入らるゝやうな愛がほのめいてゐる、蟬の羽の輕く　雪の肌膚を包む下着の白繻袢の薄々見え透く帷子を着て、紫繻子の帶二重、三重、玉を延べたやうな足の爪先が、緋のコールランの駒下駄の鼻緒に照り映えて、夏の日の、薄暑い朝日の光、後の茅葺の大屋根の棟越に、處女の姿を地に印してゐる、

『何アに、蛇ぐらゐ何ともないや、この鐵棒で突殺してやるんだ、ね、兄さん』

清といふのはまだ十歳許の椀白盛、眼の圓い、唇の紅い、色の眞黑なのが、白の水兵式の小い洋服を着て、肩から斜に白の布呂敷包を油團掛にして紺足袋に草鞋掛、手

春雨

に持つた指ほどの太さの鐵の棒で路傍の小石を丁と突いて、得意顔で振り仰いだ

『ハ、、清さんが居りや大丈夫だね、……ぢや行つて來ますよ』

一寸と會釋して、脚胖草鞋で甲斐々々しく扮装つた、四角帽に金釦鈕の、大學の制服を着た廿四五の青年、双眼鏡やら水筒やら、植物採集の鐵葉鑵やら肩も重げに携さへて、一本の杖を持つてゐるのが、小兒を促き立てゝ、歩み出す

『ぢやお氣を附けなすつて』

『姉さん、僕が山の上から双眼鏡で見るからね、此處へ立つてゝ頂戴よ、ねえ、好いかい』

立止つて振返りながら云ふ

『そんなに遠方が見えるもんぢやないわね、早くお行でなさいよ、兄さんがお困りだからさ』

『だつても、ねえ兄さん、見えない事はないわねえ、一里位の處は好く見えるんでせう』

『そんな事を云つて姉さんを窘めたつて、この暑いのに、外へ出て立つて居られるもんかね、それこそ人間の干物が出來ちまふよハ、、』

快濶に笑ふて、シガーの吹殻をはたと地上に投げる、足は自然と止つて、躰は半ば顧み勝である

『眞實にね……』

頰邊を一入紅く染めながら、美輪は莞爾、野風が稻の香を吹送つて、畦の案山子の弱腰をぐらつかせて、うして、今、洗ひ髪を地の青い頭の中央から筋を立てゝ颯と吹分けて、宛ら綠の波のうねるかのやうに、吹返しては又綺れて縺れて、眞白な額を掠め、肩先へさら〳〵と靡きかゝる、

『ぢや好いよ、その代、れ土産を持つて來ないからさ』

清は不平げに頰を膨らせた、

『もう行かうぢやないか、段々遲くなるから』

と小さい手頸を握つて引張るやうにする

『ア、もう清さん、お行でなさいよ、兄さんがお困りぢやァないかね、そして性の惡い事を云はないでね、あの一つ梅の花を取つて來ておくれよ、ね、好い子だから』

『だつて、姉さん、此處に立つてゝくれないんだもの』

『無理な事を云つて、窘めるんぢやないよ、さァ行くべし、行くべし、あれ御覽、山が俟つてるぢやないか』

『エ』と云つて清は顏を向變た、

廣々とした靑田の中の畦を劃つて幾列飛び〳〵に立てる櫟の樹の間を綴成せる幔幕のやうに、向の山がうねうね、浪形を作つて、東西に走つてゐるのを踏臺にして、巍然、半空に聳えたる、笠のやうな形をした一面の芝山が、所謂妹山と云つて、我がふる袖を妹見つらむかと歌の聖、柿本人麿の咏中にも入つた名山、海を扳くことは將に三千丈と云ふので、

『ぢや姉さんは此然に立つてゐますよ、だから早く行つて、早くお歸りなさい、ね』

『眞實かい』

『嘘なんか云ひやしないよ』

『屹度、ぢや僕は花を取つて來て上げらァ』

『さァ、早く兄さんと一緒に、さつさとお行きよ』

吹き出す烟草の烟が、角帽の緣を掠めて、さつと白く風に消ゆるのが、段々遠ざかつて、十間、二十間、やがては一町、清は振返り〳〵、莞爾笑うては行く、美輪も

その都度々々笑顏で答へてゐると、ふと、角帽が振返つたので、何だか、極が惡いやうに、颯と面を赤くした、

野壺の藁屋根に、南瓜の黃な花が咲いて葉が靑々と繁つてゐる葉蔭で、二人の後姿が見えなくなつた、

すると、竹藪の切れ目から、大いと、小いとの白の洋服姿が又ちら〳〵と見え出した

小い方が俄に路傍へ蹲む、石を拾ふたのか、烏が周章てゝ、田の畦から、畦へと飛んで行つた、大き方が振向いて此方を見てゐるやうである、美輪は又莞爾した、

（二）

四角帽は理科大學生、志水準吉と云ふて、村の豪農、清水家の婿養子、學士の肩書を得次第、美しい娘の夫と侍れる幸運を担ふ人であるが、夏休暇を機に、此回、歸省したのである、今日は其專門の、植物採集、旁々、登山して英氣を養はうと云ふので

雜木山を扳けて、芝原へ出るまでは左ほど疲勞も覺えなかつた、が、是からが骨である、鎌を入れ切れないので思ふまゝ生ひ繁つた、茅萱芒が膝を埋め、腰を沒し、肩までも届く所がある、路は覺束なく人亂れて山蚍はぶん〳〵群つて來る、森閑と

して、何とも云へない、寂味が胸を壓して起るばかりである、

『清さん、少し休むで行かうよ』

傍への大きな石の塵を手巾で打拂ふて腰を卸した、

『ハ、、僕も少と疲れたから休まう』

小額の珠なす汗を拭きながら片手は海軍帽で風を煽つて、側に押並んだ、

日は中天に、火傘をさし翳したかのやう、淋漓と湧出る汗に、躰中はびづしよりと、

息は喘いて、舌は焦げ付くばかり、準吉は水筒の水を一口飲むで、清にも進めた、

野嵐が吹起つて、ざわ〳〵と騒がしく草原に青い浪を熨斗て行く、大蛇がその中に

潜んで、のたくり廻るのではあるまいか、何となう物凄くも思はるゝが、併し上衣を

取つて、肉色の編襯衣の、襟を濶ろげて、涼しい風を入るゝのは、又何とも云へぬ、

好い氣持である、

『アッ、蛇が……』

清は驚然と叫むで、逸早く鐵の杖を取直して、身を起しさま一突、茅萱が横に靡い

て、其根際に萎けて咲いてゐた桔梗の花が、むざん濃紫を地上にこぼした

『何うした』

準吉は眼鏡越しにきよろ〳〵と見る

『あれ〳〵、彼所に逃げて行つてらァ、もう草ン中へ隱れて了つた、小錢形のつい

た、大きな蝮蛇だつたのよ』

『殺してやりや善かつたのに、惜しいことをしたね』

『金光のする眼で以つて、僕を睨んだのよ』

『恐かつたのかい、ハヽ、、、』

笑はれて、力味み返つて

『何んの、蝮蛇なんか、恐いもんか、兄さんは』

『兄さんは怖いものはないよ、人間より外にやァ……』

烟草を吹かしながら、笑顔である

『だつて、巨蟒やァ恐いでせう』

『短銃があらァね、打殺してやるに譯はないんさ』

腰の邊を探りながら、猶も笑顔で、清を見入つてゐる

『ウム、ぢやァ僕だつて恐くはないよ、……あのね、兄さん、蝮蛇が段々、年を老

ると、巨蟒になるつてね、眞實かね』

『左様ぢやないよ、巨蟒は巨蟒で、別な物さ』

臂を延ばして、茅萱の一株を根こそぎ、引き抜いた、黒い土の粘氣を持つたのが、執念く附着いてゐるのを、振り落して、仔細らしく其根際を見詰めるのである

清はふと何か目に入つたやうに

『ね兄さん、ほら、あの、向の方に一本、松があるでせう、あれが天狗松つて云ふの……』

指さす方を見向ふとめせず『ウム、ウム……』と頷いてばかりゐる

『ね、兄さんてば、一寸御覽なさいよ』

『どれ、何處に』漸く振り向いた

『ね、見えるでせう、松が、あの松にね、天狗さんが來て休むんだつて、……天狗さんつて、眞實に居るもんでせうか』

つくづくと顏を見上げてゐる、

『そんなものが汝、……天狗なんてものが居て堪るもんか、迷信、迷信なんだよ、そんな事を云ふのは……』

『迷信つて、何ァに……』

『科學の……學問の上の道理と合つてゐない、つまり、ありもせぬ事を、眞實にある事のやうに、考違をしてゐるのが、迷信、迷信と云ふのだよ、幽靈だの、天狗だの、お化だの、狐憑、狸憑、あんな事を云ふのがそれなんだよ、學問のない、馬鹿な人が、一生懸命に、眞實だと思つてるのさ、清さん等は小學校で學問を勉强してゐるのだから、そんな馬鹿な人の云ふ事を眞實にしちやいけないぞハ、、、』

『だつて……あの……牛若丸は鞍馬山で天狗に劍術を敎つたのだつて、祖父さんが云つて聽かせたよ』

涼しい眼をぱちくり、半信半疑の面相をしてゐる

『あれはつまり豪い人を一倍豪らさうに見せようと思つて、後の人が好い加減な作り事を云ふのさ』

『八幡樣へ行つて見ると、ちやんと牛若丸の繪が書いて、畫額に上つてらァね』

『左樣かい、ハ、、、』

埒もなく笑つて、石から腰を滑べらせて

『さァ行くとしようよ』

立上つて、山の頂を見上げた

『兄さん、あの、仙人つて云ふのは何だうろうね』

清は猶も無邪氣な問答を余念なく試みるのである

（三）

茅萱の根に縋り、地を這ふ蔓草を力に、路なき路を分け上るかと思へば、やがて劃然と刈り取つた秣の跡、小砂、小石の露はれてゐる黑土を踏むで上つて行く、或は斜めに、或は眞直に或は螺旋形に、うねりくねつて、嶮しい所は軍歌で勢を附けて、難澁な場處は手を引張つて遣つて、荊棘の刺に上衣の裾へ鍵穴を明けたり、石串へ乘つて膝坊主を摩剝いたり蛇を驚かして、驚かされて、虻を追立てゝ、追立てられて、浮世は七轉八起の、辛さ、苦しさをこゝにも味はざるを得ないのであつた、

『もう一息だぞ、清さん、元氣を出して……』

後から抱き上げるやうにする　返答はなくて、其細い首筋に汗は珠と流れ、鼻息の喘む氣及が如何にも、甚く疲れたらしいのである

『さア、確かりして、清さん、弱込んだのかい』

『左樣ぢやないの』少し勇氣を出して、早間近い、頂上を望で、草の葉を掴み掴みして、小足早に上つて行く、後からそれを追ふやうにして、準吉は續いて行つた。

兎角して登詰めると、一歩、先立つた清は、ぐたりと草原へ寢轉んで、澄み渡れる蒼穹を仰ぐのである、桔梗だの女郎花だの、蒲公だの、いろ〳〵な草花が、茅花交りに咲いてゐる中に、雪のやうに、眞白な服を着けて、人里離れた高山の絶頂に横はつてゐる其無邪氣な姿は、神々しいやうに感じられるのである

準吉は傍への黑つぽい、扁い石に腰を掛けて、一息繼いで、採集器の中へ入れて來た夏蜜柑を手に取つて剝き始めた、

『清さん、この酸いのを喫るが善い、氣持が清々するよ』

『ハア、今に行くからね』

『早く來なくちやア、僕が皆平らげ了ふよ』

『ハア今に』起上りそうにもない

一袋口に含みながら、準吉は片手で、双眼鏡を取上げて

『アラ、姉さんが、門口に立てるのが見えるよ』

『眞實に……ドレ……』岸波と身を起して、清は飛鳥の如く駈け寄つた

『一寸、それを……』奪ふやうに手に取つて、

『兄さん、何處に、一寸教へて頂戴』

『嘘だよ、嘘だよ……一杯喰はしてやつたの、さア蜜柑をやるが善い』
『何だい……兄さんは』
疳走つた聲で云ひながら猶も四邊を眺め廻してゐる
紗の如く引渡したおぼろ染の雲に擬ふ海の色、茫乎と夢のやうに島影をぼかして、
白帆の小く、星ほどに見ゆるのを眺と看守つてゐると、やがて氣が遠くなるばかり
で、脚の下には摺鉢を伏せたやうなの、牛の臥つてるやうなの、杉の木立の欝然と
茂つてるの、半分禿げて赤土の露はれてるの、いろんな形をした山山が、相環つて
中に田を挿み畑を挾み、人家、森、神社、野寺、製造所の烟突等を點綴して、十重
廿重に城廓の如く取圍んでゐる、その遠方、やう〳〵烟に薄れて、紫色に凝つて、
大浪小波が遙に、水色の空に入るかのやう、
暫くは自然の大觀に打れて二人とも無言
準吉が投げ出してゐる足の側に、一本、山百合の花が紅に匂ふて、微かに風に頷く
のが、ふと目に入つた、折らうとしたのか、手を出して、又猶豫うて、暫く見惚れ
てゐる、
『アラ一つ梅が……』清は駈け寄つて、其百合の根の、草に交つて咲いてゐる、白

い五瓣の、草花を手にした
『姉さんは、嘘を云つて、欺したのだから　取つて返つてやらないでも好いのだが』
『ア、それかね一つ梅といふのは、一寸お見せ、成程梅のやうな花だの』
準吉は手に取つて、其花瓣から、蕚から、葉、莖、根、と仔細に調べ始める
『お返しなさい、兄さん、山王様へ上げて來るから』
『山王様つて、何に』
『ほら、あの高い處に、石が見えるのでせう、あれが山王様、行つて見ませうやア、
　ね兄さん、この山の神様なの』
『ア、行つて見やう、山の神つて、何んなものだか』
『あのね、荒神様だからね、惡戯をして、倒したりなんかすると、直ぐ大風、大雨
　になるんですとさ』
『馬鹿な……そんな事があるものか』
二人は高手をさして進みつゝあるのである
『だつて、去年、否、一昨年、村の椀白な子供がね、大勢で、上つて來て突倒した
　んだつて、そうするとね、直ぐ、大風大雨で、稻なんか皆流れて了ふもんだから、

神主が一人で御託に來て、漸とそれで止んだのだつて』

『そんな迷信を……村の人がそんな事を眞實にしてるの、ろんな迷信は打破らにやいけぬ』

二人は今、石を重ね合せて、小い祠のやうにしてある中へ、怪しい像を彫りつけた黑い石が立つてる、所謂、山王の前へ來たのである。見れば小い鐵の鳥居が、幾つとなく前へ立てかけて五穀豐穰の紙幟が算を亂して横はつてゐる、清は帽を取つて小脇に、一つ梅の花を持つた手をズボンの膝にした

『何をする、石なんか拜むで……』

準吉は苦笑した

『だつて、この山の神さまだもの』

『そんな馬鹿な、……迷信といふものだよ、石塊ぢやないかそれが何うして、雨や風を起すことが出來るもんか』

『そんな事を云ふと、罰が當らァね』

『ハ、、、罰が當るか、何うだか、僕は杖を當て、見やうよ』

發止、山王の像は後へ倒れた、妙な響がして

『アレ、兄さん……』清の顏色は、青白かつた

怪禽一叫、低く頭上を掠めて飛んだ、それを見送ると向の峰の上に、一團の白雲、つくね芋のやうなのが現はれてゐた。

（四）

準吉と清と、今家へ歸り附いて、門口へ足を入れたか、入れぬかと思ふ刹那、天地も碎くるやうな響がして一巾の電光火柱を立て、落雷が田を隔てた向の鎭守の杜の神代杉を擊つた、天は一面、薄黑い、綿を重ねたやうな密雲で、蔽はれて了つて、重くるしい空氣が胸を壓するかのやう、妹山は全く雲で鎖されてゐて、魔神がその黑い衣の袖で、隱したのかと思はれる、

二人が書齋と定まつた南向の八疊の室で、衣を解いて　涼を納れてゐる處へ、簀子障子を押して、立現はれたのは美輪である

『お湯にお召しなさいまし、清さんも一緒にね』

紺絞の白地の浴衣を抱いて來たので

『ハア難有う、ボッ〳〵降出したね』

屋根を打つ大粒の雨が、ばら〳〵霰のやうな音を立てた

『兄さん、山王さんが怒つたのだよ』
『馬鹿な、……白雨が來たのぢやないか』
『白雨つて、雷が落ちたりなんかするんだもの、山王様が怒つたのだよ、ねえ、姉さん、山王様を倒すと、大雨風になるんだつてねえ』
『汝、惡戯をしやしまいね』
美輪は淺く、眉根に皺を見せた
『否、僕ぢやないの、兄さんがね、突倒したのだよ』
『ェ、兄さんが、そんな事をなさるもんですか』
『僕ぢやないよ、眞實に倒したんだよ』
『僕ぢやない、清さんなの』
準吉は一番戯嘘ふて見る
『左様ね、惡戯をするのは何處やらの人に極まつてゐますよ』
美輪は、笑を口元に見せて、加勢と出掛けた。
『嘘、々、僕ぢやない、僕は知らないよ、好いとも姉さん、一つ梅の花をやらないから』

ポケットから根株に黑土の附いた白い花の美事、咲揃うてゐるのを取出して、見せびらかす。
『アラ、お呉れよ、ね、清さん』
膝頭で、すり寄ると、赤ん目して
『あか、べい』
『ハヽヽ人の惡いね、ぢや僕の取つて來たのを上げやうかね、尤も花をいぢくつたり、根を分けたりしてあるから、滿足な者はないんですよ』
『それぢや、頂かして下さいよ、清さん、貰はなくつても好いよ』
美輪は、得意らしく、笑顔である
『誰がやるもんか』清は口惜しさぎれ、意地の強い口の利きぶり
雷の音は遠くなつて、雨が今一しきり、斜めに銀の矢を射出す如く、降り濺いで、小止もない

（五）

夕方から風さへ吹添うて、雨の脚も容易に上りさうにもない、
山寺で暮六つを撞き出して、その響が大波紋を畫いて鎬々と鳴り渡つた。

風は次第に吹募つて、雲は漸く低く、覆りかゝるやうに迫つて來て、何となく氣遣はしい空模樣、二百十日を目前に控えた昨今、農家の心痛の種子は早くも蒔かれつゝあるのである

俄然、妹山の絶頂とも覺しき方角から怪しい悲鳴の聲を擧げて、天鹿一陣、砂を吹き、石を飛ばし、黑烟を立てゝ颯と、驀然に吹き下した、田面は右往左往に搖れ交す稻の穗の、大浪小浪を疊み、返し、捲き返し、螺旋形に旋風くつて、案山子を吹き飛ばす、野壺の屋根を引剝つて、空高く投げ出す向の森が鳴る、此方の林が號ぶ山が唸る、川瀨の音が高まる、雨は横しぶき、今將さに大暴風雨となつて、天地暝晦、黃昏の色は早くも黑闇々の中に葬られて了つた。

志水家といへば村の舊家、萬手丈夫に取固めた構であるが荒れまさる風の手に、庭の土塀が押崩されて、凄しき響を立てる、母屋の屋根に、穴を穿つて、降り込む大粒の雨が、宛ら千束の槍を突刺すかのやう、ガラ〳〵韮と、物を投げ付るやうな音がするのは、倉庫の屋根瓦が滑り落つるのでもあらうか、

門際に二三株、根を張り、枝を伸べ、鬱然と青葉若葉重り合つて繁つてゐる古木の柿が、メキ〳〵と裂かるゝやうな音を立てゝ、澁柿が枝から振落され、板庇を打つ

て宛ら礫を降らすやうだ。

『兄さん、山王樣が怒つたんだよ、あんな罰の當る事をしたもんだから』

清は元氣のなささうな顏色をして、眼中に恐怖を含むで云かも何だか威嚴のあるやうな聲音で云つた。

『清さんかい』

今まで熱心に、採集して來た植物を白布掛けた卓の上へ並べ立てゝ、赫々と洋燈の火を强めて、表を作りかけてゐた準吉は、一寸と振仰いだ

『何うしたつて……清さん』彼は戶外の暴風雨を知らぬかのやう、極めて無頓着なる調子である。

『山王樣の罰だよ』清は頗る眞面目である

『何うしたつて』準吉は解せぬ樣子

『大雨風になつたぢやないか、兄さん、罰が當つたのだよ』

『ハヽヽ、あの今日の事か、……低氣壓が日本海近傍に出來てたんだね、天氣豫報が見られないんだから、つい大失敗が出來たんだよ』

事もなげに笑つてゐる

『僕が云つたんでせう、お止しなさいつて、それを聽かないもんだから、こんな事になつたんでさァ』

眼は怪しう閃めいて來た

『ハヽ、石塊を倒したから、暴風雨になつた譯ぢやないんだよ』

『だつて、石塊なんて』

後からすら〳〵と入つて來て、傍に斜めに座つたのは美輪で

『アヽ清さん、一寸と、彼所へ行いてお出で』

『何うして』と小頸を捻る

『一寸と、私、兄さんにお話があるんだからね　汝は彼方へ行つてお在よ』

『ハァ』清は不承無承に、立去つた、

後を見送つて美輪はやをら、準吉の方へ瞳を移した、長い睫毛の下に憂の影の宿つてゐるやうな、霑んだ眼光

『あのね、今日、貴方は妹山の山王樣を倒しなさつたのですつてね……清が串談に云つてるのかと思つたのですが眞實の事なんですか』

準吉は輕く笑つて、

『左樣、あの子があまり迷信を云つてるもんだからそんな考違をさせまいと思つて倒して見せたのだがね、折惡うこんな事に出逢せて、孺子をして名を成さしめたやうな譯で』

シガーの烟を悠々と鼻から吹出してゐる

美輪は氣もそゞろに愁はしげに眉根ヶ顰めて、

『あのね、兄さんこんな事を云つちや笑はれますけども、昔からの言傳で、あの山王樣を倒すと、屹度、大風大雨になるんだつてね、村の人が皆恐れてゐますのです、お父さんや、お母さんも、それ丈は度々例のある事で爭はれないものだつて、眞實にしてゐらつしやるもんですからね、兄さんが左樣云ふ事を……あの清が話したもんだから　大さう御立腹でございますの』

『エ、そりや何うも困つたね』

準吉も聊當惑の顏色である

『何十町歩の田が荒れて、臺なしになつて仕舞ふつてね、御立腹なさつてゐますの……私がいろ〳〵宥めましたけれども』美輪の額は稍、下つて、片手疊に落して白魚のやうな指先を、眸に押當てゝ、微かに鼻汁をすゝる音

『左様、そりや何うも』準吉は腕を叉いた

『あのね、後生ですから、……私も行きますのですから、山へ上つて、御像を元のやうに起直して下さいませすまいか……ね、兄さん』

白地の浴衣の袂をその紅深き唇で嚙へて、碁石のやうな眞白な前齒をちらと見せ、頬に窶る、鬢の毛の憂に得たへぬ風情である

『何うも……くだらない事を仕出かして』

準吉は途方にくれた爲体、美輪は一膝押進めて

『あの、折角、御卒業なさる時が近くなつて參りましたのに、今何うの、斯うのと云ふ事がありましては、……お父さんは一刻者でございますからね、……村の衆へも迷惑をかけて濟まん〳〵つて、自分がした事のやうに、大變氣にしてお在なさいますからね』

面は颯と、赤らむで、艶々しく、一入いぢらしう見えるのである

『何うも困つたね、僕はあまり馬鹿々しくつて』

『何うぞね、兄さん、私を……私を助けると思つて』

『同窓の者が聞いたら……石塊を起しに行くなんて、この大暴風の中を、……何う

も大學生がそんな眞似は、い、笑草ぢやないかね』

『でせうけれど、私を可愛さうだと思つて下さる御心がありや……』

美輪の顔は眞赤になつて照り輝いてゐる

『……』

『ね、私を可愛さうだと思つて下さる御心がありや……』

『……』

『ね、兄さん、馬鹿々々しいか知れませんが、私を、私を可愛さうだと思つて……』

『……』

風の聲、雨の音、木が折れる氣及、垣が倒れる響、戸外は修羅の巷、魔軍の吶喊の最中である

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

神か、人か、二つの黑い影が、大暴風雨の中を拔け、黯澹墨よりも黑き闇路を通して、綺れつ、縺れつ、妹山の方に向て走つた、風を御するの仙か、雲に駕するの魔か、それとも夢か、將た幻であつたか、

《完》

夏の夢

すぐしろのや

草刈連の兄弟
黄金の釜を堀ると見て
さむればおなじ夏の夢
襤褸の袖をはぢにけり

胡蝶みだるゝ夏花や
薊の堤露滋み
希望に生くる人の世の
夢うらやまし兄弟

夕暮人の絶ゆる時
破れし家を立ちいでゝ
藪の小道の岩陰の
榎の下に來りけり

それ弟の富の夢
山に百町野に百町
秋の垂穂は刈るがまゝ
冬の薪は樵るがまゝ

名を戀ひ慕ふ兄の夢
千箱の寶携へて
時に顯れ雲の上
時に晦れて野邊の民

高き榎の葉を茂み
夕風そよぐ星の空
力うちふる鍬の柄の
荒き拳の見ゆるかな

夢の正夢巖が根の
深きに誰かひめ置ける
朽木の箱の蓋とれば
これ古びたる釜ぞある

若き血汐は湧きたちて
二人見かはすめのひかり
勝関あげて藪陰の
薄き月夜を歸りけり

名もなき賤の身なれども
幸は來りぬあばらやに
黄瓜朝咲く畑道を
市に運ぶや金の釜

希望の花は朝の露
散れど集めむ陰もなし

希望の家は夕日影
追へど捉へむ山もなし

東に奔り西に行き
黄金の釜をひさげども
物の價を知らざれば
購ふ人もなかりけり

あゝ一時の榮かな
迷ひてかへる道芝の
すぎにし跡を眺むれば
涙ぞおつる草の上

昨日の夢やいづこなる
くづれてきゆる夏雲の
白雨すぎし野の草を
また刈りに來る兄弟

人影

葵山人

《上》

持て生れし儘の裸百貫と、戯歌に勢を付けて可愛らしきは、白き褌、尻の邊り少さく結びて、目倉縞の腹懸の衿垢黑う光りて、半ば色の褪め果てし、買ふてからッ半季の奉公、末は屑屋の籠にも覺束なし、同じ單の腰切筒袖に、後姿見せての捻ぢ鉢巻、明けても暮れても、水よ流しよと滑りかゝる板間踏みしめて、井戸側に釣瓶繩との力競べ、溜桶に映る姿眺めて泣くもある可し。夜の更けて通りは人足疎らに、按摩の流し笛冴ゆる頃よりの後仕舞、見懸けによらぬ一骨折れて、ぐたぐたと綿の樣に勞れ果てし身体を、破蒲團に横ふる、一睡入の間もなく、おい野呂又、今日はお前の番だ、賴むぞと、搖り起されて、厭が云はれず、おいしよと起き上れば、どこやらに聞ゆる明の鐘、耳に氣疎く、寢ぶた眼こするゝ佗し、漸々の事に竈焚き付くれば、生憎の烟、眼鼻に入りて、咽び涙吉しむ事大方ならず、八時にもなれば、家内の誰彼も起き出でゝ、番臺に入らつしやいましの嬌音、山の手に鶯湯と呼ばれて、美しき娘を名題に、戸の開け閉て姦しくなれば、同じ給金貰ふても、古顔は由

藏の竈場に楊子遣ひながら、晝迄は寢よと起きよとお前の氣儘、好いた樣にするが宜いはと、聲懸けられて、有難うと腰低く、のさりのさりと部屋に入るも夢心地、想ひはいとし懷愛しき、故郷の空に彷徨ひて、馴れし野川の岸邊に、流るゝ水の行末を見つむる身にしみじみと寒さ覺ゆるに、不圖眼を醒せば、風はたはたと破れ障子に鳴りて、身は綿薄き夜着の袖に、包まる味氣なさ、今更ながら過し昔の夢の回顧されて、其れよりは眼の冴へて眠むられず、あれよこれよと思ひ煩ふ辛氣愁さを、寢回り打つ折節、障子ガラリと明けて、おい野呂又、何時迄寢て居るのだ、眼が腐るではあるまいか、午砲も鳴たに、腹は空かぬかと、同じ希望に故郷の山、袖を連ねて、背に見し、吉松に起されて、あゝと蒲團の上に、起き直る心爰にあらねど、強情き顔見するにもあらねば誰に見せるともなき、ニタニタと頬に入れる兩笑靨、無口は持て性質のまゝ燒直されぬ、親恨む迄もなし、枕元の煙草入引寄せ、燐寸の火に二三服、烟り長閑に吹くものゝ、思ひ中にあれば、我知らずあゝと太き溜息吐くを、吉松横より覗きこむ顔に皺寄せて、また思出したのか、男らしくもない、廣い世間にお照一人が、女ではあるまいし、愁寫眞なにかを持つからに、入らぬ物思ひをするのだ、引破て仕舞な、何程戀愛た所で、今では後指もさゝれぬ人の持物

手出しもならぬ高根の花、其れも近所に居るではなし、海山百里向ふの故郷に可愛い赤兒の着物でも縫て居るはと、笑はれて、何馬鹿な其んな事をと、口には云へど低頭きし儘なり、其なら今の溜息は何であらう、變るな何の變りましよと、誓文生木の樣な戀中を、人情知らずの音吉に、割かれた腹立まぎれに、家倉田地田畠、金が物云ふ新地の酒に打ちこんだのが、今更悔しいのか、綱付けぬ迄も、牛か馬の樣に、呼捨てにせられて、追使はれるのが、悲しいのか、泣たとて笑ふたとて、貴樣も新屋の若旦那樣と、村でも立てられて、宵宮の晩にも、肩臂張つた顏が、云はゞ自業自得の今の姿で、伯父や伯母の袂に縋られた義理でもあるまいし、人の手前もあるわ、斯して稼ぎに出たからは、よしか此の上どんな苦勞をした所が、馬に三駄土產物積んで、鈴の音景氣よく鳴らされる樣にならねば、國の土踏まない約束では なかつたかへと、云へど答なきに、吉松心焦らちて、何を左樣齬ぎこむ、少しは氣でもはきはきして、偶には洒落の一つでも、云うて見るが宜いではないか、愚圖愚圖してると又由の野郎が何とか文句附けに來る、其れでなくてさへも、やれ野呂又の愚圖又のと、聞いても腹は立ちながら、つい己れも釣り込まれて、同じ樣に云ふて退ける口癖、又彼奴の惡戲だらう、頬面に此男賣物と、筆太う書いてある、早く

顏でも洗つて齒でも磨いて置けは能い、あのお照に生寫しの美くしい新造が來る時分と、語り合ふ折から、女湯の流しを知らす柏子木の音二つ、

《下》

大路は風の音、雪ちらちらと、艶やかなる鬢の毛微觸りて、白き袷足に吹き入るを おやと身震ひ一つ、白地に桔梗唐草染めし手拭に籠目形に編みし眞鍮の石鹼入包み しを片手に、鶯湯の遣戸引明けて、お寒う御座りますと內に入れば、入らつしやい ましと例の嬌音、平生の樣にと湯札に流し賃添へて差し出せば、有難うと柏子木二 つ叩いて、回廊る硝子の小窓より、大路眺めて雪になる樣でお座りますと、愛憎よ き言葉を背に、輕く會釋しながら、藤表の吾妻下駄脫ぎ捨て、上に上りて二歩三歩 据付の大鏡流盼に、手柄美くしさ潰し島田に、手を懸ける風情、優男に呼び止めら れて、袖屏風する生娘とは思はれじ、いろは番號の衣裳戸棚、漆筆の跡太う、せす迄丼らぶ中程の開戸明けて、低く鼠鳴さのすさみ、文字に緣やあるめり、黑繻子に お納戸地の繻珍の晝夜帶懶けなく解きにかゝれば、袂長き本糸織の書生羽織飜々と、 八つ口より晝甲斐絹の袖裏見えて、小袖は大島細の井筒飛白薄白地の斜子更紗の下 着配合よく重ねし下は、絣縮緬の裾除、白き腿の覗く樣なるも媚かし、裏梅の縫模樣

意氣なる衿付けし肌着、ぐるりと脱て前方向ての及腰、むき卵子の謎に顋の懸換へ望むも、此處の姿とかや、二の腕の邊り、初々しき疱瘡の痕撫でながら、番臺の娘と顔見合して、態とならぬ片笑靨、小股歩ひに中戸繰りて、御免なされませと、一度も顔見知り合はぬ人に迄の愛嬌、我れ勝ちの男の態度の忍ばれて、何處にも女は優しきものぞかし、

化粧道具鏡の側に置きて、湯糟に寄り懸る仲には、いやいやを母の肩に縋りて、泣立つる赤兒の喚きもなく、顔洗ひながら、法名唱ふる髪切り様一人、浪のうねり靜かに、湯氣立ち籠る板場には、小桶抱へて揉上げの邊り余念なく洗ふ品能き若女房の二三人、日中の洗湯は、贅澤の中に數へられて、澁團扇に七輪煽ぐ、山の神の疳聲もなし、端歌都々一の景氣よき音も、晝なれば男湯にも聞へず、折々水をと壁板とんとんと敲くに連れて、オーイと返辭長く敲き返せし後は、一としきり水汲み上げる物音騷がしく、井戸車の輾る音に打ち交りて、君をまつ虫夜毎にすだく、眺むる月さへ思出のと調子美くしき、投節の一とくさり、誰れに聞かせんとにや、憐は其處にも潜むなる可し、後は笑聲の高く洩れて、お前の心意とは其か、及ばぬ鯉の瀧登りと、知りつゝ迷ふ心根を汲んで、今日も讓つてやる程にと平手の一打、痛しと

云ふ聲はなくて、跟々と、水口より顔出せしは野呂又、いつに變らぬ笑顔靨に入れて、湯糟顧りながら、換湯より大桶に二杯、場所よく置けば程なく、番頭さん憚りさま、今日は急ぎますから、雜とて宜ろしう御座りますと、湯氣もやもやと、島田髷少し亂れて、湯上りの色ほんのり、桃色に染まりし肌を寄せ付けられ野呂又我にもわらず胸の波立つを、拳に握りしめて、かしこまりましたも小聲に口の内、衿元流しながらつくづく眺むる横顔、鼻高う通りて、口元の優しさ、似たとは愚かしい云草、瓜二つに割つて何方と見幷ぶる、二重瞼の黒眸清しく、ふつくりとせし頬の邊り、思回してもお照其の儘と思へば、我にもあらずむらむらと、涙は語りてつきぬ此れが逢瀬の別れ路かと、鎮守の森の繪馬堂に、傾く月影恨みし事の思ひ出され、今更地鞴踏んで蹌いても、身動きならぬ、私しも死んだ心で嫁入ます程に、御前さまも其の氣で思ひ切てくださりませ、之れも前世から定まる因果とでも申すので御座りましやう、今朝も二人の中薄々知て御座る母様の、さかさまに手を突いて、涙ながらに頼むと云はるゝ、お貌を見れば、胸も張り裂ける様で、厭と云へば一人しか無い兄様を、一生垢の落ちぬ身体に爲て仕舞ふ斗りか、後指さゝれては、繋がる親子とも、此の村に居られる義理でもなければと、我握りしめし手振り放さんとも

せず、搔口說し聲の耳の底に鳴る樣に覺えられて、思はず手に持つ垢摩り下に落せば、お前さんどうしたのと、回顧られ、イエ何にもと遽てゝ流しかゝれば、流されながら、をかしな事尋ねる樣なれど、もし此の邊に、お前さんの兄さんでも、居られはせぬか、下女の云ふのには每日の樣なれど、私の見たのは、昨夜の宵の口、裏の竹垣に、のし懸つて、切と家の方を透見する人影、まさか今頃に小兒の惡戲でもあるまいと思ひ、誰何と聲懸けしに、返辭はなくて、溝板はたはたと、筒袖の後姿、歩き振り、何う考へて見ても、番頭さん其の儘、其れも僻目かは知れず、間違ふたら御免なさい、もしお前さん何處かの家を尋ねて居たのではなかつたかへと、云はるゝ一々、胸に覺えは、戀しさの募りて思出の樂しみを、其處に泣きしとは知らず、袖振合すも他生の緣と、繫がる絲は細くて、他處事の樣に尋ねられるも恨めしと、怪しき思ひの胸に迫り、せめて其の口づから、又さんと一聲なりと、云い吳しならばと、答へもなさず、凝と覗きこむ、眼と見合して、あら厭ッよ、人の顏なんか見詰めこんで、薄氣味の惡いと、亂れ髮さらさらと、膝立て直し立たんとする、肩を押へて、野呂又見下す目に、涙はらはら〳〵

無絃琴

宮

歌聲細く棹さして
港〳〵を漕ぎためしぞ
吾がしろがねの宮なきに
ふたゝび擢に手をおかん
夕べ〳〵に見る夢に
島かげの宮星ありて
とばりのうちを照しては
神のみくらを示しにき
纜ときてふるさとを
そがひになしゝ旦より

露葉

夜每の夢の手をとりて
行くての望みもたらせり
擢とる腕たゆきまで
今舟やりてさすらんぞ
夢はむなしや舷に
その島かげは見えざりき

聲

星は別れて海にゆき
闇とこしへに下りけり
聖なる衣ぬぎすてゝ
重きくびきを今たゝん

岩かげいかふ小羊は
足うらに音をさとり得て
木のくれ深き夜の間を
なぐさめもなく走りけり
野に聲きこゆとく去りて
草あたしか　程をこそ
せめてはひとり寂なましを
さばきは彼を縛めぬ

森の百合

一

鴉騷ぎて木の實落ち
玄へたげの歌きこえけり
社の供物盗み得て
追はるゝ狐の聲ならん
凱歌もなくひた走る
狐よすでに來るらんか
空しき係蹄をうちすてゝ
人樹によりて銃をとる
ほろびの脚にかけられて
「死」に下りしも幾人か
榮光、滅亡をつかさどる
「時」よ吾等のものならず
しへたげの歌近づけり
暗く冷たき命運の
手におかるゝの時ぞ今
豚に加へし劍もて
狐をほふらん人は誰ぞ
常盤樹「時」の寵を得て

ほこれる枝の蔭深く
なが世小暗き草むらに
うらぶれなくか小百合白百合

二

「時」はめぐりて新潮の
のぞみもたらす聲きこゆ
さだめを出でし白百合を
彼のかひなに與へんか
理想のかげをほの見せて
見よわだつみの際涯なく
かゞやく銀鞭をふりかざし
アルプス越えし帝王の
山河の覇圖もたゞならず
さらば白百合はやゆくか
匂ひは高き島かげの
香柏林に日はおし照れり

牧童の歌

一

羊を飼ふなるわらべひとり
群れ〳〵追ひつゝ「今日も暮る」と
牧場にいそぐ逢魔が時を
葡萄の玄づくに髪もぬれて
いとしを待つなる姉を知るか
野鳩は追ふとも蛇はうつな
今もし鎌首高くあげて
なれにせまりて炎はかば
木蔭にかくれて笛をとれよ
やすきを奪ふはかゝる痴者ぞ

森なるひじりの石によりて
木の實をさゝげつ雲をのぞみ
怪しき聲音ぞなれを呼ぶは
去れ〳〵木の實の餌にゆくな
そはなにのろひにうゆる聲ぞ
鞭とり笛吹き群よぶとき
やさしき節に戀を知るか
心のやすきに空をあふぎ
星に感謝の聲をあげて
かくるゝ光りに歌を思へ

二

小羊ゆかず首うなだれて
ぬか毛かきなで歩めといへど
なくかつかれに聲音もひくゝ
暮れも近きにはや草を踏め
夕霧ふかく野をつゝみはて
迷ひの宮もいざ今よりぞ
灯火かゝげ鈴うちならし
さかしき祈すだまがなすは
月と星とのめぐりをうけて
天と地との幸多き子よ
雲は歸るにいましの友の
たゝずむ野邊の狹霧を思へ
ゆかぬ節に神の名とけよ
さは吾れ行きて星にぞつげて
なれかなやみを慰むべきに
待てさびしくも榎のもとに

末の露

薫園

さらでだに心交の友は少きを、昨日一友を失ひ、今日また一友を失ふ。末の露、もとの雫、おくれ先だつ世のためしはせむ方なけれど、ゆく先の暗くおぼつかなさに、顧みて我はありし人の情に泣かずむばあらず。

われ不幸にして、幼時母にわかれ、團欒のたのしみ早うたえ、加ふるにまた同胞の緣うすく、姉ありたれど夭死して、今はたゞ纔に、一人の妹のあるのみなり。憶ふ、親しかりし富本松濤、われより長ずること數歳、あふぎて兄事せしに、明治二十七年葉月の末つかた、身に玄む初秋の曉風にさそはれて、もろくも桐の一葉と共にちりゆきぬ。數ゑげき露玄もにかこちても、なほあまりあるわが袂、片時だにはしあへざりし頃、藤江君、はじめてわが柴門をたゝかれぬ。亞山としての君を知り、親しく共に文學を論ぜしは、實にこの時にあり。要一郎としての君を知りしは、明治廿五年わが築地中學に在りし頃なりきと雖も、われもと狷介の性、人に交るを好まず、只君のわが級に在りしことをのみ知りて、一言も言葉をかはさゞりしかば、君の人と爲り、また君が文學に長ぜらるゝことなどは知らざりしなり。われ今はしなく第二の

松濤をえたるを喜び、それより互に往來して、へだてなく浮世をよその物がたりに、袖のえづくの、えばしはかわきぬる時もありけり。

君天資温厚にして篤實、頗る古君子の風あり。君常に好んで漢文漢詩を作る。殊に漢詩は、君の最も長ずるところ、嘗て一夜に五十首を吟じて、儕輩を驚かしたることもありきといふ、君また最も同情に富めり。わが松濤を失ひて悲しさにたへず、江湖相識の士に乞ひて、追悼の歌文を集め、「忍の露」と題して上梓するに至りしは、實に君の力與て多かりしなり。越えて廿九年の八月、その三年の忌にあたり、われまた「手向草」を出すにいたりしは、君の力によるもの少なからず。かく君の未見の友松濤に於けること、なほわれの松濤に於けるが如きものありき。君が同情のあつかりしこと、この一事にても推しはかられぬべし。

手向草成りてより、程なくわれ腦をやみて打ふしぬ。一日、君わが病床をとはれける時、われ庭前の梧桐の一ひら二ひら風なきにはら〳〵と散りそむるを見て、悵然として、わゝわれ今亡友のために手向草をものせり、われもし業成り名とげずして泉下に入り、明日はやがてこの事わが身の上にめぐり來らば、いかにせむとひとりごちしに、君、さる心細きことないひそ、萩さくころにいたらば、君が病は必ずいえむ。そのをりまた訪ふべし、などいと懇にわれを慰めて歸りぬ。

萩はさきぬ、されどわが病はいえず。君又わが病床を訪はれ、籬の菊の咲き匂はむ頃に至らば、必ず怠らむ。心長く療養してよなど、又懇に我を慰めて歸りぬ。

籬の菊は咲きぬ。されど、わが病はなほ癒えず。君またわが病床を訪はず。えばらくして、君が友なる渡邊春溪氏、わが病をとはれ、告ぐるに、君の肺をやみて歸郷せられしことを以てす。こをきゝたる時のわが驚きは、いかばかりなりしぞ。筆とりて君が病をとはむとすれど、醫かたく家人をいましめて、筆紙を與へしめざるをいかにせむ。日々むなしく、わが寸裂せむとする思を、君のもとに馳するのみなりき。

かくて、病ひの床にうかりしその年も暮れて、明治三十年の春のはじめ、軒端の梅花一枝、東風に綻びそめむとするころ、わが病はまたく癒えぬ。まづ一書を君の許によせて、その病をとひしに、日にそへて快きかたなり、安心してよなど返りごとあり。たまゝ、われさる女學校より聘せられて、國文の教授を擔任することゝなりぬ。ひと日、十六夜日記を講じて、慈母の子を思ふの厚きに泣き、家にかへりて君の許に一書をおくらむとし、まづ今日の事をえるし、さて親の子をおもふは、か

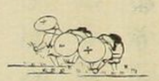
ばかり深きものなり。君、病にふして已に半歳、父君母君の御心を煩はし給ふこと、そもいかはかりならむ。とく癒えて、御心をやすめ給へなど認めておくりぬ。五六日へて、病は日を追ひてよし、この秋には上京することをえむなど返詞あり。

この夏、われ都のあつさにたへかねて、逗子の濱邊に遊び、その歸るさ、横濱中村の里に君が病をとはむと思ひしに、滯留いまだ幾日ならざるに、妹より祖父君俄に病に罹り給へり、急ぎ歸り來られよとの飛信に接し、あわてゝ歸程に上りたれば、竟に君をとふと能はざりしは、今より思へば、實に千秋の恨事なりけり。

やゝありて、祖父君の病は、怠られぬ。君の病はいかならむと思へど、何くれと俗務にいそがはしき身の、文かゝむ暇もなかりしが、九月の廿五日ばかり曉の程より俄に胸の痛み出づるを覺えぬ。朝、臥床をいでゝ、藥などものしけるに、やゝ快くなりつれど、何となく今はものうくて、登校すべきこゝちもせざりしが、例の車夫の促すと急なりければ、心ならずも、校堂に上りぬ。講ずると一時間にして歸らむとせしに、一生徒走り來り、今日は御氣色極めてわろし、御病氣にてはおはせずやなど問ふに、たゞ胸いたしとのみ答へて、校門をいでしが、常にはさまで急がれざる家路の、今日は何となく急がれつゝ、やがてわが門に入りぬ。妹、あわたゞしく出

で迎へて、兄君早く見そなはせよ、藤江ぬしには、この曉に身まかられたる旨、今しもぬしの父君よりいひおこせ給へりとのことに、夢かとばかり驚きはてゝ、えばしは物も覺えず。あはれ、去年の秋、わが病床をとひて、萩咲く頃は癒えむ、菊咲く頃は怠らむと、われを慰めたまひし君の言葉、今なほさやかにわが耳に殘れり。今年も秋の風はやふきたちて、萩は野邊に錦をおらむとし、籬の菊やう〳〵匂ひそめて、霜に傲らむとすれど、君は已に世に在らず。かけても思ひきや、多病のわが身生き殘りて、すこやかなりし君が、我に先だちて館を捐てむとは、されど、われ亦病めり。君があとを追はむとも遠からじ。わが過去は、闇に葬られぬ。未來もまた闇なり、止んぬる哉、世にわれを知る者なくして、知己泉下に埋れ、往日の歡樂、夢ならでは、また尋ね難し。嗚呼、われ長くは世にあらじ。まてえばし、泉下の友よ。

曾愁香結破顏遲。　今見妖紅委地時。　韓
若是有情爭不哭。　夜來風雨葬西施。　偉



夢

枯柳

一

悲しき今の吾が身には
夢見る夜こそ樂しけれ
夢よをり〳〵來れかし
想像の翼うち展べて

あゝ哀れなる詩人よ
如何なる事を夢みんと
吾呼べるかを告げよかし
如何なる夢も與ふべし
愁は吾の心なり

嘆きは吾の身なり
悲みふかき吾魂は
只なぐさめぞ生命なる

さらば與へん汝が夢に
黄金の山や寶玉の淵
富める族となりもせば
愁なからん汝が魂に

我望まんやかゝる夢
黄金や寶玉は吾魂に
唯一筋のなぐさめも
與ふるものにあらざれば

さらば與へん汝が夢に
高き位と佳き名とを
名譽を肩に荷ひなば
嘆きなからん汝が魂に

我望まんやかゝる夢
名譽うきたつうす雲に
限り知られぬ苦みを
つゝまむ術はなかりけり

二

黄金や名譽皆人の
夢にも望むものなるに
この二種をいかなれば
汝見るをだに望まざる

悲みいとゞ深かければ
愁さはめてゑげゝれば
かゝる夢には吾がこゝろ
なぐさむべくもあらずかし

あはれ優しき夢の神
なぐさめがたきわが魂を
清き夢路にたどらせよ
せめては暫時たのしまむ

さらば與へん汝が夢に
つきせぬ戀の語り草
汝が悲しみはきはみなく
乙女の髪もながければ

眼には涼しき光あり
言葉は甘き花の蜜
清きは戀のまことなり
夢にも戀を慕へかし

流れに臨む柳蔭
朧月夜の影くらく
共に語れば塵の世の
外にも奇しき世界あり

名譽も富も何物も
戀にかふべきものやある
如何にかなしき汝が魂も
戀の夢路や安からむ

三

こゝろ優しき夢の神
かゝる夢路によろこぶは
うき世を知らぬ若人の
まだうらわかき心なり

われも一度うらわかき
心の泉わきかへり
清き流れの戀の淵
わたりそめたるともあり

思へばゆかし月あかき
林の中の語りぐさ
ながき恨もたのしみも
あゝ一時の夢なりき

戀は生命と詩人の
いへるはまことと玉の緒を
かたみに繋くこもごゝろ

されど信ずると勿れ
いつはり多き乙女子の
あだし言葉の數々を
少女は戀の敵なり

戀の夢路をたのしみし
昔の心ありもせば
汝が與ふる春の夜の
夢になげきやゆるむらむ

今は破れしわがこゝろ
あだし戀にはよろこばし
海にも似たる恨には
何なぐさめの戀の夢

四

悲みみつる吾がこゝろ
戀の夢さへよろこばず
あだし乙女の語り草
露おくよすがあるべしや

あはき情けのまぼろしに
まことの心さゝぐるを
をしとさとれるその後は
夢にも脆くなかざらむ

乙女心をうるはしと

誰があやまちて言ひにけむ
心を肉体の犧牲となし
慾におもひを焦しつゝ

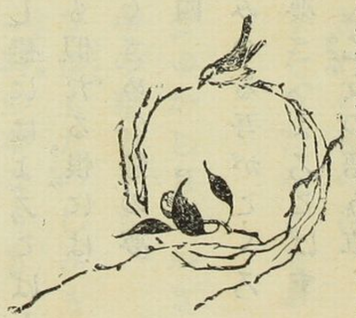
時し來れば神の前
いつはり多き約束も
そのいたゞける榮冠の
光にそばしかくるなり

葡萄の酒をくむ勿れ
似塞亞の歌をきく勿れ
情はあはき香の煙
只一時の迷のみ

乙女を物に譬ふれは
白くよそへる塁なれや
僞醜をつゝむ花衣
かしこき人は悅ばず

乙女も戀も何かせん
あはき情の夢よりも
仰ぎ去たへる神の國
聖人の夢を見むよしもがな

（明治卅二年二月相州小田原に於て作る）



四畳半

荷風

『京や。京やは居ないの？』

お部屋と定められた四畳半から、優しいお嬢様のお聲が聞えたので、自分は爲掛けた用事も其儘に、倉皇と紙門を開けて這入つたのである。

『お嬢様。何か御用で御座いますか』。

お部屋は元茶室でもあつたらしく、濡椽付の四畳半で、少さな幅を掛けた一間の床間續いて半間の茶壁、横手に一間の中窓、其下に唐机を置き、蒔繪の硯箱、色紙と短冊が二三枚、其から白磁の一輪挿に八重山吹の花が、色鮮に目醒るばかりであるが、お嬢様は机に片肱を突いて、窃と溜息を吐かれた。

『お嬢様。御用ですか』。と、重ねて問出されて、

『別に用ぢや無いけれども……ね、京や』。と、漸くに顔をお上げになつて、『京や、今夜は丁度父様も鎌倉へお出でになつて、明日で無ければお歸宅が無いと云ふ事だから、今夜は悠寛と……最う早晩お互に何時逢へるか分ら無い身体に成了うのだか

らね、悠寛と思殘の無い樣に談話を爲てお呉れな。

『はい』と、答へたが、俄に胸が一杯になつて、其儘お嬢樣のお顏を凝視て居た。

お嬢樣は磯子と仰有つて今年十九。自分には二歳の年少者であるが、撫肩のすらりと爲た身長は却て自分よりも一二寸高いので。豐艶とした、然し何方かと云ふと細面の、皮膚の滑い上に色は抜ける程白く、愛くるしい一重眼緣の、寧ろ細長い眼の、毎もほんのりと薄赧んで居る眼尻に云はれぬ味があり、唇少さく鼻筋眉毛に申分無く、つや〳〵と爲た頭髮を英吉利卷にして、秩父銘仙の一枚小袖に、黃八丈の書生羽織を重ね、水に撫子の花を染めた縮緬の半襟、帶は紫紺地に更紗形を置いた紋羽二重に鼠繻子の晝夜帶をお太鼓に締めた其の御樣子。先御容色では……と思ふのも滿更自分の慾目ばかりでも有るまい。

『京や。父樣が被居つちやお前も用が多いし、那麼かと云つて晝間はお竹やお仙なんかい、又お前の事を何の彼のと、本統に五月蠅つてね。沈着いてゐんみり話が出來ないから、今夜は悠寛と夜が明ける迄もね……最う此がお前とも談話の爲納めに成るかも知れないのだからね』。と、お嬢樣は最う潤聲であつた。

『お嬢樣。又其樣陰氣な事を仰有つちや不可ませんよ。今夜は耳ぢや、京やも御一

所に何か……最う涙の出る樣な談話は止めに爲て、何かお目出度い、氣の浮き〳〵する樣な面白いお談話を致しませう』。と、自分は態と元氣付いた調子で云つたけれども、お嬢樣は依然悄然として、

『京や。お前は何時下る事に爲たの。矢張此間云つた樣に、今月の下旬に彼地へお出でなのかい』。

『はい。仕方が御在ませんから……』。

『其ぢやア、京やの顏を見るのも、最う半月ばかりなんだね』。

『はい』。と、自分は何とも云へない心持になつて來た。

『京や。私も生きてれば、來月の上旬には最う甚麼しても、お嫁に行かなくつちや成らないんだから……本統に寧そ死了ひ度いねえ』。

『お嬢樣。不可ませんよ。又其樣事を仰有つて……。最うお互に因緣づくだと諦めて、私も死ぬより辛いのを辛棒して、お嬢樣とお別れ申して靜岡へ片付きますから、お嬢樣も其樣心の狹い事は最う決して仰有ら無いと、此間お約束致したのぢや御在ませんか』。

『其ア、約束は爲たけれども、考へると私や、澄雄さんに申譯が無いし……其に付

けても、母様さへ生きて被居つて下されば、此様事にア成ら無かつたのだと思ふと、最う悲しくつて京や、寧そ死んで了ひ度いよ』と絹手巾で眼をお押へなすつた。

『お嬢様。其はお嬢様ばかりぢや御在ません』と。自分も堪らなく成つて涙をほろ〳〵溢しながら、『お嬢様。私だつて其心持は同じ事で御在ます。お嬢様も御存じの様に私だつて遠い静岡見た様な處へ嫁になど參り度くは御在ませんけれども、去年から親爺が、當家の旦那様のお世話で静岡の縣廳へ勤めます事に成りまして、甚麼云ふ譯か存じませんが、以前東京に居ります時分に、公然と一時は親も許しまして私も其心算で居りました所を、今度急に、静岡へ參りましてから頼に思ふ母親迄が親爺と一緒になつて良縁だから是非にと、可厭應なしに結納を取代して了つた相で、其を聞きました時は最う悲しいやら、口惜しいやら、心に其と極めて居た男には申譯が無し、其こそ一思に死んで了つて、操を立通さうかと思つたので御在ますけれども、折も折、お嬢様が矢張私と同じ様な……思も掛け無い宅へ嫁にか行無ければ成ら無い様なことが出來たので、若し私が異變な事でも致したら、屹度お嬢様迄が其様な氣をお起しなさりや爲まいかと、私や只其が悲しくつて、最う何も因縁づくだと諦めて、最う其様悲しい事は云はないと、綺麗にお約束致しましたんで御在ま

すから……ね、お嬢様。何卒最う其様事は仰有らずと、何かお目出度いお話を致しませう』。

『京や。だつて……私や、京やには本統に濟ま無いけれども、私や甚麼してもお前の様に斷然思切る事が出來ないんだもの……』と頻と涙を啜つて被居る。

『然し、お嬢様。皆因縁づくなので御在ませうから、死ぬ思をすると思召してお諦め遊ばせ』。

『然う思へば諦められ無い事も無いけれども、唯後で澄雄さんが甚麼様に私の事を薄情だとお思ひなさるだらうと、私や其が悲しくつて……』。

『其は京もお察し申して居ります。奥様のお存命の時分には、度々澄雄様のお宅へもお供を致しましたり、お嬢様とお兩人の間は奥様の御存じのない事迄も私は能く存じて居りました位ですし、未だ其上に、お嬢様とは幼少時分から飯戯や手鞠のお相手を致しまして、此方へお小間使に上りましてからも、旦那様や朋輩衆の前では奉公人で御在ますが、此の四疊半へ參りますと、失禮にも宛然お友達か姉妹の様な氣が爲まして、今迄永い間お互に耻しい事も打解けてお話を致した京で御在ますもの。お嬢様のお心持はお察し申す所か……畢竟は取も直さず私の今の身の上と同じ

事で御在ますから……最う私だつて甚麼様に悲しいか知れませんけれども、今更甚麼とも爲様の無い事なので御在ますから、ね、お嬢様。先達も申上げた様に、お嬢様も私も兩人共一緒に思切つて、其様狹い氣を出さない様に致しませうぢや御在ませんか』と、自分は眞情を籠めて意見した。

『不斷から姉様の様に……去年母様がお死亡になつてからは、猶更頼みに思つてる京やの云ふ事だから、甚麼かして思切り度いとは思つてるけれども……。京や。堪忍してお呉れよ。私や最う甚麼しても生きてる氣は無いよ』。

『京やが、此程申しましても……』。

『堪忍してお呉れよ』と、ばかり、お嬢様は机の上に泣伏してお了ひなすつた。

『お嬢様……』。と、自分は慰め様とお傍へと寄つたが、自分とて原々約束した男を捨てゝ、他へ嫁く心は無いので、お嬢様のお心を察しると、悲しさが身に逼つて、口には立派に云つた様なものゝ、矢張寧そ死んで了ひ度い様な氣になるのである。

最早や過行く春の夜、窓に近く八重櫻の散る音が、何とも云へぬ寂しさを添へて居る折から、奥の間のぼん〳〵時計が徐に十二時を報了つた。

『おや、最う十二時で御在ますよ』と、自分は急に氣を變へて、沈着いた語調で云

出したが、お嬢様は依然獻欷いて被居る。

『お嬢様。甚麼遊ばしたんですよ』と、お嬢様の肩を搖つて見て、『お嬢様。夜通お話し爲様と仰有つたのに、其様に泣いて被居つちや、本統に京やが困つて了うぢや御座ませんか。え、お嬢様。最う十二時打ちましたから、鳥渡皆に寐て貰う様に然う申して參りますから……』。

『あゝ。然う云つて來て……』。と、まだ顔をお上げ爲さらぬ。

自分は勝手の方へと出て行つた。

二

『お嬢様。竹やも仙やも、皆先へ睡眠りましたから、此から悠寛と……最う〳〵死ぬなんて其様縁起の惡い事は云ッ事無しで、何か面白くお話し致しませうよ。と、自分は態と蓮葉な語調で、甘分ばかり過ぎて後、再び四疊半のお部屋へ這入つた。

見ると、お嬢様は机の上にカビ子形の寫眞を置いて、其に毒と顔を押當てた儘泣いて、被居るのである。

『まア、お嬢様……困るぢや御在ませんか。と、自分は進んでお顔を覗込む様に首を差伸した。

『京や』と、お嬢樣は涙に顫へた一聲。

『何で御在ます』と、云つたが、今のお聲が妙に自分の胸に響いて、甚麼云ふ事か急に動氣迄が高まつて來たので、驚いて凝と又お顏を見詰めた。

『京や』と、再び。

『お嬢樣。何で御在ますよ』と、愈胸騷が爲て、自分は最うおろ〳〵聲である。

『京や。お前は……』と、漸く顏をお上げになり、『お前は最う諦めてお了ひなのかい』。

『何をで御在ます』。と、僅に胸を撫でた。

『何つて……。お前は最う諦めて、靜岡に行ーうんだね』。と、穴のあく程自分の顏を御覽になつた。

『はい』。と、自分は最う胸が裂張ける樣な念であつたが、此處だと心を取直して、

『お嬢樣。ですから、貴娘も斷然とお諦め遊ばして……』。其儘云切れずに突伏して了つた。

『京や。お前は諦められるか知れないけれど……』。と、お嬢樣も少時無言であつたが』、私や、甚麼した緣なのか、甚麼しても諦められ無いんだから……ね、京や。お

願だから、私を死、死なして……』。

『お嬢樣』。と、自分は覺えず聲を顫して詰寄つた。『お嬢樣。お嬢樣に其樣な事をお爲せ申す位なら……お嬢樣。京やは今迄此樣切無い念は致しません。幼少時分から不絕お世話になつた奧樣への申譯や、又失禮ながら骨肉の妹よりも猶お可愛く思つて居りますお嬢樣に、其樣悲しい事をお爲せ申すまいと思ひますばつかりに、京やは今迄立派に諦めたと申して居たので御座ますよ。若し此が私の身一つなら、最う既に約束した男に情を立てゝ死了つて居るので御座ますけれども、私が其樣事を致したら、屹度お嬢樣も私と同じ樣な氣をお出し遊ばすに違ひ無いと、私は只其が辛さに、未練の無い樣な事を申して居たので御在ますが、私だつて女で御在ますもの。甚麼して平氣な顏で笑つて居られませう。けれども、お嬢樣。死んで了つた所で人から親不孝と云はれる計りで、何も益には成ら無いので御在ますから、京やを姉さんと覺召して、何卒其樣なお氣を出さずと、京やも死ぬ所を辛棒致しますから……ね、お嬢樣。何卒貴娘もお諦め遊ばして……』。

『京や。堪忍してお呉れよ。私や今迄其樣深い親切な心から、那麼云つてお居でなのとは知らなかつたのだから……』。と、お嬢樣も瀧なす涙で、『京や。だけれども私

や甚麼しても諦める氣になれないのだから……。京や、强情な私と愛想も盡さ樣けれど、其丈親切な心があるのなら、何卒私を死なして……』。

『其位なら、今も申上げた樣に、京やが先に死んで居るので御在ますけれど、お孃樣に其樣事をお爲せ申しては、お死亡遊ばした奧樣に申譯が御在ませんから……』。

『其ァ、私が黃泉で母樣に申譯を爲るから……京や。私ァ最う甚麼しても外の所へ嫁く位なら、例令不孝と云はれたつて、最う其樣事は構や爲ない』。と、お孃樣は絶入るばかりにお泣きなさつた。

見て居る自分は張詰めた氣も弛んで、彼や此や……自分の身の行末抔を不圖想起して、腑甲斐なくも同じ樣に其場に泣伏したが、何時か身体がずーつと暗い處へ沈んで行く樣な心持になつて、はつと我に歸り、慌忙てゝ洋燈の心を搔立てゝ見て、

『お孃樣。貴娘のお意中は京やも最う能くお察し申しては居りますけれども、今更何と仰有つても、奧樣はお居でが無し、甚麼しても旦那樣の仰有る樣に爲さらなければ成ら無いので御在ますから……。お孃樣も……私も諦めて靜岡へ片付きます、お互に死ぬ所を辛棒して……ぬ、お孃樣。那麼爲ましたら、其中には又思ふ樣にも……然う悲しい事ばかりも御在ますまい』。

云つても、最う口さへ利けぬ程泣いて被居るので、自分も同じ樣に暗涙に暮れて居ると、又もや洋燈が、油でも或は心でも足りなく成つたのか、以前よりは最と、段々に薄暗くなつて來た。

夜は追々更ける。窓中には落花の聲がさわ〳〵と、恰も無情を誘ふかのやう。

自分は堪らなくなつて、夢中で泣きながらお孃樣の手を把つた。

『京や。私や死ぬ』。と、片手にはカビ子の寫眞を堅く握りなすつた儘、お孃樣は突と顏をお上げになつた。鬢の後毛が幾條とも無く、眞靑になつたお顏の上に亂掛かり、俄に頰骨が現はれて　最う此の世の人とは思はれぬ位である。

自分は甚麼したのか只譯も無く顏出した。

『京や』。

『は、はい』。

『京や。私や死ぬからね……』。と、突然がくりと躓る樣に、又もや泣倒れてお了ひなすつた。

其響に机の上の洋燈の焰が、ちよんと搖動いたと見ると、又一際暗くなつて、黑い油煙がふーつと一筋立上つた。折も折、目白の二時の鐘、草木も最う眠つたと云

ふ合圖で。

自分は總身へ水を掛けられた如く最う何だか現世の人では無い樣な感じが爲て、握合うたお嬢樣の手迄が不厭に冷くなつた樣にも覺えた。

『お嬢樣』。と、自分は窃とお呼び申して見た。然し、御返事が無い。

『お嬢樣。最う死ぬお覺悟なんですか』。

『京や。最う何にも云つてお呉れで無いよ。嘸我儘な憎い奴とお思ひだらうね』。

お嬢樣は痛い程自分の手を握返して最う殆ど其儘絶入るかと思はれるばかりに、ひた泣にお泣きなすつたが、俄に手をお放し爲さると同時に、すつと立上られた。其途端、英吉利卷になされた鼈甲のピンが抜落ちて、長い冷い黒髪が颯とばかり自分の額を撫でた。

自分は思はず飛退くと、お嬢樣は其儘、

『京や。澄雄さんに一言宜敷と云つてお呉れ。腹も立たうけれど、私の一生のお願だから』。と、障子を開け樣、雨戸を閉忘れた濡椽から戸外へ行かうと爲された。

『先、お嬢樣……』。

『京や。お願だから止、止めずに……』。

『お嬢樣。私も死にます』。と、最う夢中である。

『えッ。京やも……』。

『は、はい。お嬢樣が那麼云ふお覺悟なら、私だつて、何で此樣世の中に……』。

鮮と抱合うた。

三

最早や春も末ながら、有繋は深更の寒氣が骨に浸通る樣で、庭は一面に眞白く、落花の雪に埋れた其上に、向ふの高い植込から、僅に其半分程を見せた鎌形の月が淡い青白い光を落して居る。

自分はお嬢樣と手を引合ひ、跣足の儘、椽から飛下りて軟な落花を踏んで立つた。

『お嬢樣』。

『京や』。

今更の樣に凝と互に顔を見合せたが、自分は……お嬢樣も同じ事……最う涙が盡きて了つたのか、更に眶が濡れて來なかつた。

『お嬢樣。甚麼して死ぬので御在ます』。

『甚麼してッて……京や。死ぬる樣にして死なしてお呉れよ』。

自分は何を云つたのだか、お嬢様が何様事を仰有つたのだか、云ふのも聞くのも、最う何も彼も夢中で、兩人手を握りながら、衣服の裾を引摺り〳〵、何處を甚麼來たのか、耳元近く四時の鐘の鳴つた時、兩人の身体はお屋敷からは左程に遠からぬ關口の瀧壺の前に立つて居た。

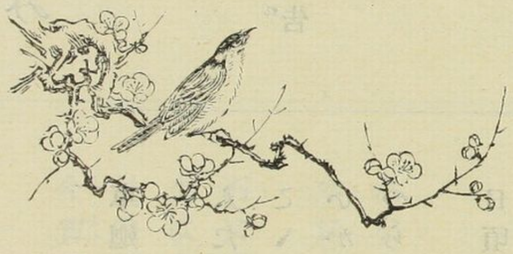
眤と再びお嬢様と顔を見合せたが、月は早や西へ落ちて、春の夜の星光は餘りに淡く……或は氣の轉倒して居る所爲でもあるか、自分は最う温い美しいお嬢様のお顔を見る事が出來なかつた。で、お互に其頰へ接吻し合つたが、お名殘の惜しまれて、自分は稍しばらく、自分の頰をお嬢様の頰の上に重合した儘動かなかつた。其時は眶は最う自然と閉ぢられて居たのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其から、最う幾日過ぎたとも想像の付かない或日の事、ほつと眼を開いて見ると、看護婦が枕頭に、自分は病院の一室の寐臺の上に横臥つて居た。

甚麼云ふ譯で、甚麼して此處へ來て居たのであるか。那時、お互に縮緬のしごきを解きて、抱合つたなり堅く身体を締め縛つたお嬢様は、何處へ行つてお了ひなされたのであるか。

看護婦は何にも云はずに隣室を指して呉れた。けれども、二人の運命は、那の靜な懷しい四疊半へ、再び舊の様に、平和な穩な有様に、自分とお嬢様を長く涙なしに戻して呉れるであらうか。



（卅三年三月作）

はつかねずみ

わが愛らしの小鼠よ
世に怖ろしき病毒の
汝が身にあると思はねど
殺さにやならぬ政府の布告

椿の葉にし積りたる
雪の姿の優しさは
天の獣と見えもすれ
珊瑚の粒か赤き眼は

初聲あげし嬰兒の
手に充つほどの米やれば
足りて小さき箱の中

花外

車廻して遊べるに
ふたつ揃ひて睦じく
こゝに子を産み住へるに
いかでか外に出さるべき
つらき別れをさせうべき

日頃嗜める米倉か
廣き座敷に放たれて
命とらるゝそれよりも
小さき箱をよろこばん

物を害なふ心とて

狹き胸には無きものを
悲しや我は刑吏となりて
箱のそとより又そとに

ゆる せ鼠よ人の世も
汝に似たる事おほし
靜かに眠れ黑闇に
哀痛はそこになかるべし

忍のぐ

貧しき家のいたづら子
繪具もろたと筆持ちて
壁や着物に書きちらす
乳呑兒抱きて衣縫ひし
母は悲しく門口の

河に繪具をながしけり
水は流れて海に入り
繪具はとけて消えてゆく
此子の末やいかならん

虫の命

水なき河のかなたなる
空に黑雲おこりけり
石に隱ろひ歌うたふ
虫は哀れや曉の
星の消えざるそのさきに
今宵流ると知らざらん
花月も咀へ高樓に

宴を開くともがらは
やがて烈しく革命の
嵐吹くとは知らざらん

松を刺して

或る日激するところあり
提に登り草を踏み
匕首を抜いて松をさす
風は塵揚げ吹き來り
松は悲しき聲をあげ
雲にむかひて叫びけり
おのが甲斐なき身を嘆き
奸物殪す勇士の
歌をうたひて歸りけり

墳墓

墓場に出でゝながむれば
空に輝く星のかず
世にときめきし帝王の
光に似たり冠の
列ぶ墳墓みわたせば
パンを與へよ救へよと
天を仰ぎて訴へし
餓ゑたる人の群のごと
草葉をつひの宿とし
露を命と鳴く虫は
いづれにむかひ悲しめる
あさがは

見るも哀れや朝がほは
嵐のなでし姿なり
天むく地むくさま〳〵の
同じ恨みの葉のふりや
あせし色こそ悲しけれ

泉の邊りにて

森の樹の間に白く光れる
泉に來り今日も立ちけり
ふと我が顔の映るを見れば
あゝ若いかな頰はやすれど
愁ひ悲み夜は惡夢に
泣きつ恨みつ廿年あまり
憶ひぞ出づるをさなき時よ
泉に來り遊びもせしが
西に東に燕のごとく
春をたづねて疲れて病みぬ
目に土ぬりて盲となりて
枯葉を耳にあつべきものを
血多き胸にはかりさだめし
人の希望や美はしけれど
幼童の手にて掬びし水の
漏れてはあとに嘆きあるのみ

鶯

雛振りとれし鶯は
早く汝が歌をうたはぬと

憂しや小兒に罪をえて

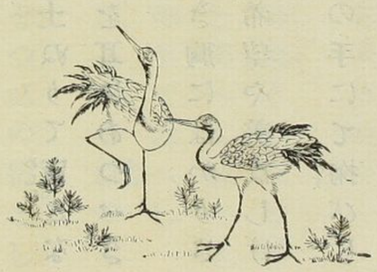
軒の雀も寢ねたるに
冬の夕ぐれ寒空を
むごや庭へと放たれぬ

籠をだされて温き
家を慕へどこがるれど
戸は閉されて悲しやな

雪は翼に降りかゝり
胸毛ふるはし木の枝に
飛ぶもあぐみて立ちゐしが

日さして庭をながむれば
流浪樂師の鶯は

鼠に嚙まれ死してけり



梅花三十趣

櫻巷

（其一）

清寒水の如く窓を徹し、坐に人をして襟を合ざしむ、机に憑て靜坐碧巖を誦す、身神立に仙化す、頭を擧れば三更の月、梅枝を描いて窓紙に横はる、奇趣畫手を奪ふ、窓前一枝梅花月、纔在詩人便不同。

（其二）

奔流矢の如く。岩に裂け崖に觸れて、雪を噴き花を散ず、百折して深淵に到り、靜、死せるに似て一波動かず、筏あり、おのづから流れを下り、こゝに至りて動かず、舟師篙を把て起つ、崖端の梅、枝を倒にして潭に臨む、篙に觸れて散ると五六點、清香綠簑に滿つ、然も舟師は身畫中の物なるを知らざるなり。

（其三）

海に遠くして鮮介なけれど、山に近うして寒雀庭に集ふ、今朝一羽を獲す、即ち背戸に出て菜を摘み、晩の羹となさんとす、林に沿ふ三畝の畠、薄暮の風おのづから香あり、手を留めて香を追へば、林下の疎梅一朶開く、折てこれを瓶に挿し、今宵

友を得たるを喜ぶ。

（其四）

一穂の孤燈に對して四更に坐す、酒漸く醒來つて渴を覺ゆ、一窓の蠶聲雪積む事幾寸ぞ、かくては水瓶の水も氷りたちん、起て戸を排し、窓前掬來枝上雪、不知一半是梅花。

（其五）

草紙讀みさして假睡の、香夢さまよふ所を知らず、梅花影裡羅浮仙に會す、琴瑟の聲枕上に鳴る、仙樂を聽くが如し、夢覺て耳を傾くれば、これ點滴の響なり、いつしかに窓の梅が枝影消えて朧月夜ぞ雨になりぬる。

（其六）

籬落の春を尋ねて荒村に入る、藪の下道行暮て思はずも農家の小庭に出でぬ、藁うつ音も長閑なり、桔枝の響も靜なり、牛の鳴音も春めきたり、茶畠の中に一株の古梅あり、つくろはぬ枝振面白きに、不遠慮にも宿の主を驚して、梅の木蔭に佇みつ、低徊顧望去る能はず、主人心あるや、まめ〳〵しく茶を勸む。

（其七）

鎭守の社新に成りぬ、朱の玉垣も木蔭に際立て初午の賑ひもおもはれたり、森を入れば白木の玉垣まだ木の匂ひも失せやらぬを、打消して一木の梅、神威いと嚴なる清香を吐く、社頭の梅は飽まで崇高なり。

（其八）

敷松葉に朝の霜薄くなりて、春なれや石燈籠の苔も青みぬ、この朝げ日影麗に、開放す障子に風の寒からず、立出る椽に早くも持運ぶ坐布團烟草盆、女房振もいと嬉しく、烟草くゆらして打眺むる庭前に、一株の盆梅、幹は小さけれど香氣四邊を拂ふ、小僧を呼びてこれを椽に上せしむ、朝茶一段の幽味あるを覺ゆ。

（其九）

行憊れて山間の一小村に着す、既に暮る、一點の火光を認めて近づけば、木賃の文字もいと煤びたる行燈掛りて、怪しけなる小屋なり、入りて一夜の宿を乞へば、主婦甚だ無雜作なり、前の小川に足洗へといふ、則ち溪に下れば、せゞらぎの音も寒し、暗香何の邊よりか來る、見廻せば岸に沿ひ家を繞つて梅多し、かくては孤窓の夢も風情あるべし。

（其十）

肥桶といへば汚なけれど、其傍に梅ありて又畫中の材となる。

（其十一）

不許葷酒入山門。無垢の淨地俗を劃して、禽聲もおのづから幽なり、一道の石甃人影絶えて、廣々たる祇園枯木立の寂寞たり、柵を繞らしたる老梅の、何々とむづかしき標札建たるが、我は顏に匂へる、所柄とて一しほ氣高し。

（其十二）

骨牌に更けて歸る夜道、月なき夜の闇は綾なし、匂ひばかりは隱れぬに、誰が住む家ぞと心憎く、足を留めて垣間見れば、梅は何處に在るとも見えず、やゝ母屋を離れたる小坐敷に、燈火赤く障子を射りて、ゆかしき琴の音も洩れくるなり。

（其十三）

俗地にありてゐひとり淸雅を保つは梅なり、あらゆる不潔を極めたる裏長屋、山と積む掃溜の傍に梅あり、花は少けれど春を忘れぬ匂ひをほらしく、世に顧みられぬ貧兒か袂にも香を傳ふ、何者の沒風流ぞ、怪しきものなんど其枝に乾かけたり、花神も爲に顰すべし。

（其十四）

寒鴉亂れ啼て黃昏の色は漸く森を包む、壘々たる墓石古きあり新らしきあり、世に在りし程は貧富貴賤の懸隔ありしならん、今はこれ同じ土、數株の梅は不斷の香を送りて平等の匂ひを頒つ、世の悲しさを集めたる墓地の夕暮も春には漏ざりけり。

（其十五）

日は午なり、鷄犬の聲近きは村も程なかるべし、一茶亭に憩ひて行厨を開く、媼が汲み出す澁茶も渴しては甘露の味あり、亭の左一梅樹あり、正に滿開なり、旅人の脫きて投かけたる草鞋の枝にかゝれるも趣あり、土人は梅の茶屋と呼ぶとぞ。

（其十六）

奉納の石獅まだ新しきに、梅花亂點、鳥居を潛れば一脉の幽香、早く衣袂に泌す。

（其十七）

つれ〴〵とそぼ降る雨今朝もやまず、病起の佳人徒にものゝ書に耽る、窓外鶯の二聲三聲、嬉しうも友の訪ひ來しよ、梅の花笠さして來ぬらんと微かに口吟みて、南の窓推しあけつ、聲や何處と見出づれば、燃るばかりに咲たる紅梅の、枝うつりして又一聲啼きぬ。

（其十八）

朝起窓を推せば、夜來雪積む事五寸、庭樹一白、枝もたわゝに折れなんとす、簑と笠を招んで庭に下り、長竿を把て雪を拂ふ、雪片碎け飛んで笠を撲つ、奇香あり鼻を穿つ、怪しんで樹を見ればこれ梅なり、枝頭はやく花を着けたりけん。

（其十九）

書院碁を圍む、栓石霰聲を作して局に落つ、幽香何の處よりか來つて坐を襲ふ、その扁額を讀めば、梅花書屋と題したり。

（其二十）

南向の隱居所日當よく、盆樹皆開く。炬燵を擁して終日事なし、硝子戸越にこれを眺めて獨り自ら喜ぶ、清香窓紙を徹して來る。

（其廿一）

寒林枯木、何の趣味もなし、偶々巨巖の傍に梅花の開くあり、一味の春意、蒼苔を蔽ふ。

（其廿二）

挿木の梅、徒に嫩芽の黄綠なるを見て、二年を過ぎぬ、今春始めて數輪の花を着く、嬰兒の物いひ初たるにも似て嬉し。

（其廿三）

猫の額程の小庭、四時の花は僅に緑日に購ひし鉢植物に見るのみ、然も花の趣味を解するに非ず、風情を賞るにもあらずして盆梅花開くを喜び、これを庭より上せて長火鉢の傍に置く、家は藝妓屋なり。

（其廿四）

霜夜の辻、今日ばかりは人の往來繁く、兩行の露店軒を並べて燈光星の如く連れり、この氛氳の裏に一區の小庭を形りて、松あり柏あり、一團の綠を築くは植木屋なり、盆栽の花卉いづれも時ならぬ花を見る、數株の梅もあり洋燈の陰に清香を吐て、甚だ愛すべし、價を問へば若干と答ふ、折合ずして行過く、哀れこの花、誰が庭の眺めとなるべきや。

（其廿五）

梅園を徜徉する年十三ばかりの處女が、手の届く程の處に二三輪の花を着けたる小枝折りて、これを銀杏髷に挿したる、枝折る可らずの禁札はありぬとも、花守は咎めも得爲されまじ。

（其廿六）

長亭短驛卅里、氣車は今偖樂園丘下を過ぐ、湖上の春風異香を吹て車窓に入り、乘客二百の衣袂を薫殺す、驚いて園を望めば、南崖一白の梅花、東歸の客を迎ふ　香氣岡角を廻つて猶失せず、知らず歸宅して細君に昨夜の移り香の疑を受けざるか。

（其廿七）

百年の綠苔空しく墓碑を封じ、功名偉蹟あはれ一基の石と化して烈士の墳墓荒れたり、梅あり墓を護して風霜に立つ、芬芳の志を傳へて、凛然たる花樣、侵す可らざる高潔の風を示す。

（其廿八）

梅花の窓、白髯の人あり、靜に詩を註す、清香硯池に落て、筆端又香を帶ぶ。

（其廿九）

山間に隱遯して世事を念とせず、財はたゞ千卷の書のみ、今は讀破して要なし、即ち之を賣て百株の梅を購ひ、後圃三畝に植う、隱士ひとり春に富めり。

（其三十）

喞唔の聲竹林に響く、村塾の屋後一株の梅、枝に習字草紙を乾たり、兒童は菅公の愛樹と知らざるなり。

輕舸小人の記

掬汀

名高き靈場を目前に控えながら、朱欄廻廊の古色をとぶらはんともせず、夢魂空しく八十八島の邊りに縈繞して孤燈仄暗き旅館の階上に、永き一夜をまぼろしの如く過しぬ。われ、時に古人の遺韻を誦しては、宮城の原の秋色の、いかに微芒蕭條たるべきかを思ひ、あるは名勝誌風土記などを繙きては、松洲の嵐光いかに瀟洒雅麗なるべきかを思ひ、遊志徒らに猛りて空しく十餘年の春秋を過せるものを、たゞ〳〵時を得て今こゝに宿望成り、瘦殘の形骸を擁して鹽釜に着せりし夜の嬉しかりしは我が拙き筆のよく表顯し得べくもあらず。

明け殘る二十日月の、鹽釜社の森にかゝりて、街路甍などを照らせし白き月光次第に褪せて、人は尙ほ殘夢枕頭に低迷する曉方より、居汚き亭婢を呼起しつ。朝餉認むるも匆々に、脹れ面したる、頰赤く頸許のみ白き亭婢に送られて遊覽船出所に到りぬ。

紺綬の長合羽を着したる、神奈川縣の『六號海山』と名る、號からして變妙なる俳人と、洋服扮裝に駒下駄穿きたる關東の某村長殿と、弊袍破帽のわれ鶉措大との三珍

物を乗せたる一小輕舸は、十月二十日午前六時、炊煙立靡く鹽釜港の埠頭を離れて、小蒸汽船、大艀船などの限りも知れじ碇泊せる中を、巧みに櫓を繰つりてゆる〳〵と進み行けり。

風なければ灣内さながら油を湛へたらむ如く、ゑかも神無月の晴渡りたる空なれば、空氣は清澄にして伊軌たる櫓聲海面を渡り、四十里隔たる南部の山々も、呼べは將に響へんとす。

あはれ我が行李の中には、纔かに松島全圖二枚たけは藏したりしも、一卷の詩集をだに懷にせざりし痴人の思案の後から出る間に、船は次第に進みて左端の一岬角を廻れば、無數の島嶼星の如くに羅列したる彼の千松島の全景は、一面の大幟畫の如く、薄紫の色彩を帶ひて一矚の中に展開したり。

大聲疾呼われ快哉を叫ぶ事三度、風なく波なく、青氈の如き漾々たる水面を、轉がるやうに響き渡りし我聲のあまりに高かりしにや、河原の左大臣が月見をなしきと云ふ籬島の一端に釣綸を垂れ居たりし海士の、ちらと我船を顧みるが見えき。

俳士は寛やかに煙を吹いて低吟し、村長は瞪目して沖合遙に漕ぎ入る片帆影に目を凝らす。まことや自然の大觀と冥合すれば、心、我を脱し、想、實を離れ、詞華空

湧の湟なきものとかや。桃青こゝに句なく、法眼筆を棄てたりしも亦宜なるかな。

只見る、島に千態萬狀の差異こそあれ、近きは瘦松根を岩角に托し梢を波に嬲らるゝ風光は、いかなる典雅の筆も及ばじ　遠きは夢より淡き一握の青螺、風吹かば流れ漂はんかと疑はるゝ大景は、いかなる名畫も及ぶべくもあらず。清容崔巍相交りて、織りなす天地の花ごろも、信夫摺する陸奥の、あはれなる名を擧ぐると亦幾何ぞや。

船頭は櫓臍を外して三角帆を捲上げぬ。此時微風徐ろに吹出たれば漣漪清しく立ちて、遠き水平線上より朱盆の如き一大朝暾の、下に一人ありて持上ぐるやうにする〳〵と浮び出でぬ。半帆の風を孕める我輕舸は、此光線の波に浴しつゝ、輕く、輕く走り出しぬ。

舳の塵を吹拂ひて、腰を下せる船頭は、お客樣方はお初の御遊覽と見ゆるが、此船中の眺望如きでは、葦の管から大空を窺けるやうなもの、まことに、八十八島の大景を双眸の中に容れんには、扇谷の絶頂に如くものぞなき。御一名五錢づゝ御奮發下されなば、扇谷まで御案内申すべぎに。と、夫とはなしに誘ひ出す談話を聞けば、未見の大觀胸に描かれて快感すゞろに起り、いかにや乘合の御仁、猫眼貨一個もて、

天下の壯觀を購ひ得ぐくば、鹽煎餅十枚貢る我慢にて事足りぬべし、と促せば一同實にもと相槌うつ間に、氣早の艪頭櫓の手を早めて、船は扇谷の渚に着きぬ。三十分の後には、我等は扇谷の頂なる、柱歪み軒傾きたる小さき達磨堂の中にありて、前に漂渺たる八十八島の全景を瞰下し、清癯鶴の如き老僧と苦茗を啜りつゝ、恣に神來の興趣を貪り居れるなり。

達磨堂の背後なる四五段の石磴を上れば、其所は三十坪程の坦地にして、正面には幽禪染の頭巾を被れる地藏尊の、淋し氣に立ち給ふ前に、水晶の如き水を湛へたる山の井の、只朝夕に、老僧の閼伽を汲むのみなればにや、其澄みたる水の面には、さながら塗盆の　蒔繪模樣の如く、漆樹、柞などの紅葉の落ち浮べるを見き。

恁る塵寰を懸絶したる仙境の、此詩趣多き達磨堂！、浮世を隔てのなせ垣も要らぬば、月は射し入るまゝに任せ、風は戸扉に神の默示を囁く中に、百八煩惱の羈絆を斷ち、大悟の光に參透して、人の榮華を幻花の如く見過す貴僧の心事の羨しさよと、我は數度讃嘆の聲を擧ぐれば、否とよと老僧は破顏一番して、さる皎潔の生活をだになす得べくば、いかに人の世の樂しさかは知らねど、此處には松島瑞巖寺の末寺にて、福聚山、皆無量壽寺と稱する古刹ありしが、昨年の秋雷火に燒かれて、危く

も殘れる此達磨堂の中にて、御見物のお客樣に茶を勸きて幾何の米代を得つ。それも己が自由になるならば、世を氣儘の生活も出來得べけれど、上り高の一切は瑞巖寺に捲上げられ、まるで茶賣出店の番頭見たいな、三月或は半年毎に交代するものなれば、人は風流の極み、悟道の至りとして稱へ給へど、見掛に依らぬ生活の難は、浮世の智慧と云ふやつの、かゝる仙境ゃで俗化し了せしはかなさを知り給へ、渴しては草露を吸ひ、飢えては菓實を啖ひ、靈鷲の月を心に觀じ、恒河沙數の凡俗を濟度すべき、大慈悲心を涵養する修行無比の此靈場も、蛇より敏き末世の凡僧が、木魚うつ手に算盤彈く有樣となれりしかば、さしもの伽藍、一朝雷火の爲に烏有に歸せしもの、みなこれ佛菩薩の御冥罰なるべしとの述懷。咄！浮世の汚風は、此神境までも吹泌み渡りしか！。

いかに六號海山子、御先祖桃青の翁は、『あゝ松島や』一點張にて通り抜け給ひしと聞侍るが、文明の俳士定めし御名吟も浮びしつらむ、願はくは其神來の響を洩らし給へよと促せば　さればなり旅人、翁樣さへ御說の如くなりしものを、末世の凡俗二三の句なきにあらねども、物々しく御吹聽申しては、翁樣に對してあまりに恐れ多ければ、と謙遜の辭は卑怯の腸より窄り出されて、其苦しさ加減餘所目にも見え

ぬ。

咄俗物！とわれは心に叱して、躰を灣の方に向け、恍然として獨其美を貪れり。わが我が達磨堂は、四面燃ゆるが如き紅葉の木立にて圍まれたるに、前には片下りなる十坪ばかりの畑をしつらへ、露を結べる里芋の葉の、微風吹く毎に千顆の珠のころ〳〵と轉がり落ちて、椽側近く亂れつる鷄頭の花に、羽がひかよわき秋の蝶の飛交ふさへあるに、畑も、床下も、森林も、はては屋根も軒端も虫の聲、無數の金鈴を打振る如く、鏘々鄭々として鳴連れ居れるにあらずや。尙其前は、名こそ實より生れたれ、松灣一碧の海面は、繰擴げたる扇面にも似て、我が眼下なる要島（かなめじま）より、星散羅列せる無數の小島嶼は、恰かも名匠の彩管にて描きなされたる如く、剩へ半天の陽光海に落ちて、扇の面には金泥を撒蒔きしかと怪まるゝにあらずや。尙其前は、一碧淼漫たる太洋の水、荻の濱行の小氣船の、ゆるく煤煙を吐きて走り行く沖合に、玩弄（おもちや）物の如き眞帆片帆の、ゆるやかに行交ひ居れるなど、實に立放れにくき眺望なり。

時は午に近ければと促がされて、老僧に別れを告げて磴を下る。古碑斷礎の累々たる阪路の、右と左は、衰蘭露に傾きて、梢を拂ふ濱風に無言の秋の啓示をきゝつゝ、

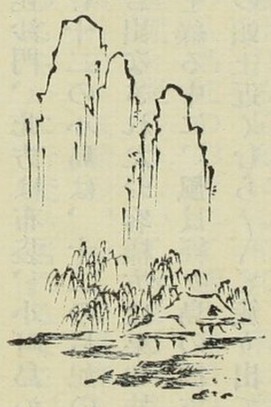
我は再び輕舸中の人となれり。船は蠣殼の潮花の如く附着せる一島を迂廻して、またもや深碧の海に出づ。

馬放島には鯛の生巢あり、彼方は毘沙門、此方は布袋、小町島から一飛び飛べば、松に化粧の化粧島、大王島を打圍む十二の小島は、十二の后妃の水鏡、その水鏡のやうな秋の天氣の、這麼好い日にお出なされたお客樣方は果報持。と案内に慣れし船頭の口調も輕く、面白可笑く櫓を繰る中に、風は經ヶ島の彼方より吹いて、何方よりや流れ來りけむ、綿の如き雲の頭上近くむら〳〵と簇り出てぬ。すはや暴風ぞ！旦那樣方をッかり遊ばせ、棧橋までは半里足らず、隆て來ぬ間に漕きつけ申さんと、よいしよ〳〵と押手の素早さ、櫓臍も碎けよと急ぎしかば、我が輕舸は後方に長き一條の櫓痕を曳きつゝ、弦を放れし飛箭の勢、十分間餘にして松島村の埠頭に着きぬ。

われは棧橋の上に佇立して、此なつかしき松洲の景に一顧盼を與へ、而して憮然としてはてしもなき空想に耽りぬ。もしわが船の、彼の要島の邊に漂ひける時、風叫喚の聲を擧げ、全灣の水こゝに狂ひて、山なす狂瀾巖を叩き島を跳越え、万顆の白玉松の梢にかゝりなば、いかに天地の壯觀を極めたりしぞと。風一陣帽廂を掠めて

總身覺えず打顫ひぬ。眼を擧ぐれば、雨は五大堂の屋根に飛沫を散して、横なぐりに飛で行く雨脚早く、觀瀾亭を一薙に薙ぎて、あはれ一面の大幢畫は、見る間に裏まれ了んぬ。

輕き小舸、敗れたる達磨堂、八百の島山、濱千鳥、いつかまた此あはれなる歌まくらを探らんや。



繪師

牧場を巡ぐるせゝらきの
岸のまさごをあらひては
すみれはなさく草のみち
水車かゝれるかはぐまの
やなぎの影をうかべては
みどり深くも淀むかな

あゝ其の水よとこしへに
淀みて行かぬものならば
人のいのちもうつし世に
ながく殘りてあらましを
あゝその水よとこしへに
流れてやまぬものならば

狹衣

ひとのこゝろも永劫に
そのはたらきを止めなむ

岸のひづちは壞え落ちて
ながれは岩にせかれても
さかまく水のなからめや
さらばいのちは秋の日の
ゆふべの露のもろくとも
こゝろはながき春の日に
あしたの花の香もたかく
世々に殘りてあらましを

やなぎは垂れて日は霞み

蝴蝶のはねもたゆげなる
去年のまき塲の春にきて
埒に眠れるうしかひが
夢あたゝかきまひるどき
きみは繪筆を手にはして
微笑みてこそ居たりしか

梅のはやしにつゞきたる
小山のすその菜ばたけに
つま木になへる山かつが
あばしくゆらすけぶり草
烟にたてるかげろふの
はかなき影のみゆるとき
きみは繪筆を手にはして
微笑みてこそゐたりしか

まき塲の牛は生ひたちて
納屋の夕日に餌をあさり
小山がすその菜ばたけに
猶かげろふのもゆる日は
見し世の春にかはらねど
あゝ牛かひよ山かつよ
汝はこゝにあらざるか

さくら花さくふるでらの
かしこにおほき墳墓に
あゝあたらしき我が友の
名を刻むこそはかなけれ
彼の牛かひよ、山がつよ
汝もこゝにあらざるか

亡き我が友の繪ごゝろの
たくみに入りし賤の男が
いのちは水のゆくがごと
歸らぬものとなりぬるを
名を傳ふべきはたらきの
なほ殘らぬもはかなしや

されどたゞとし、萬象の
美妙をうけて生ひいでし
わがなつかしき友の名の
ながきはまれは行く水も
よどみて淵とたまるごと
殘るこゝろはかぎりなく
こゝの野山にひそむらむ
あゝたゞとしや、歌人の

こゝろは世々の春をえて
すみれの花とささそめて
蝴蝶のゆめをやどすなり
あゝたゞとしや我が友の
こゝろは千代の春ごとに
繪絹は野べのうすがすみ
その筆の香の花に殘れる

人孺

紫草能爾保敝類妹乎爾苦久有者
人孺故爾吾戀目八方

桃さく春はかへれども
君が姿を若草の
匂ふあたりに夏むべき
月澄む秋は遠けれと

君が心ぞ八千ぐさの
あふるゝものと思はんや

花咲きをゝる里川の
水の流れは清からで
なぎさは落つる白瀧の
淵瀬に花の影ぞなき

愁ふる勿れ我妹子よ
春美しき深山木の
知られぬ花もあるものを
唯かりそめに嘆かじな

されど御空の夕ぐれに
星のひかりを仰ぎみて
わかき命をおもふとき

密かに君がおもかげの
昔を忍ふことあらば
うら耻かしき悲しみの
涙はおもき物思ひ

暗雲とぢて日はくれて
春は老いたる窓の中
君が手馴れの琴のねを
夜々ふく風に擬らへて

狂ふ心のいたづきに
たゝかりそめの手枕や
ゆめばかりなる俤の
語るを聞けばうれしきに
あゝ人嬬よ宥せかし
かくもやさしき君故に
戀の命はなぜか老いなむ

桃山

桃山とは葦が散る浪華の名所、春風ゆるく江南の梅を吹くころは、桃の花、ちらりと咲き初めて、やがて織り出す千段の綾錦、遠く望めば、雲とうかび、霞とたなびきて山を飾り、野を粧ふ美しさ、詩人の魂も、とろりと桃の花と共に解けて仕舞ふべしとは、反魂子が鼻動めかしての處自慢、よしや絃歌の聲に俗化せる嫌ひはありとも、遊子偶まふる郷に歸りて、花に背くは心なき仕業ならずやと、そゝのかされて、春は三月中ばの空、うらゝかなる日和に、蝶の影と後先きになりて、草庵を出でたるは、反魂子とかく云ふ吾。

反魂子が例の處自慢に打興じつゝ寺町を南へゆく。同じ浪華の中とは云へど、此處のみは自らなる別乾坤を作りて、人通なき靜けさ、さびしさ、車の音かしましげなるは聞えず、寺門のうち、磬聲のかすかなるは、ほろ〳〵と散る桃の花のあはれを吊はんとするかや。

曾て月白きゆうべ、はかなき思ひにかきみだれて、吾知らず草庵を迷ひ出で、霜よりも白き月光を滿身に浴びて、あはれさびしき讀經の聲に耳傾けしは此處よと思へば、

梅溪

かぼろしに浮ぶ昔の夢。さすがになつかしく、たゞし立止りて去りもやらざりし。』せゝらぎの音かすかなる小川の流れに沿うて、一路野徑に出づ。畑には麥青みて、菜の花黄なり、足の下を流れゆく野川の水に雲の影映りて、ゆれつ、碎けつゝらゝかなる春の日は金粉銀沙ときらめきて、川底の小石に五彩の紋を作る。野川の畔には名も知らぬ草の黄なる花をつけたる、壺すみれの紫に匂ひ出でたる、此に天然の錦を織りて、羽うるはしき蝶の靜かなる夢を結ぶ床とやならむ。

あはれ、此野川の美よ、たとへサブライムの趣なしとは云へ、大は山岳江河より、小は小草微虫に至るまで、限りなき榮光を下し給ふ春の神の御心を思ひ奉れば、吾は滿腹の悅喜と感謝とを以て、其大なる榮光を讃美せんとす。此處に無限の平和あり、其處に偉大の希望あり、誰か此平和と希望を咀ふものあるべき、歌へや、詩人御身が青春の血に燃ゆる熱烈の情炎を吐くは、正に此秋にあらずして何の日ぞ。

吾心やゝ狂はしくなりて　蝶の影を追ひつゝ阪を上る春の御神よ、願くは此僕のなめげなるさまを許し給へ、わが胸は世を憤る炎に燃えてうらゝけき春の美に狂せるなれば。

坂の左側に蜜柑賣る翁の罪もなげに眠りて、客の呼ぶ聲に眼醒めたるさま、げに長閑なる春の景色にふさはしとや云ふべき。右側は寺、堂は風雨に晒されて黑み、壁破れて蜘蛛の巣縱横に張れり、桃の花一枝、咲き亂れて、風に舞ふ落花一片、蜘蛛の巣にかゝりて落ちもやらず、女郎蜘蛛すばしこくそを捉へんとして虫ならぬ花葩に驚きて又素の中心に歸る。

此邊一帶を指して桃山と云へるなり。

左曲すれば、一泓の池あり。風ゆるく池心を渡れば、やがて美人のほゝえむ笑渦に似たらん漣の次第にひろごりゆきて、葦の葉を洗ふ、新月空にかゝりて池上に白金を碎く夕べならばと思ひぬ。村童二人、一人は網を持ち、一人は籠を携へ、汀に寄り沿ひて立てり、池に沿うてさゝやかなる家あり、破垣に櫻ちらほらと咲いて、むくつけき白犬、門前に眠る。再び野徑に出づ。青田を隔てゝ處々白雲の靉靆けるに似たるは、桃の花よと興頻りに動きて茶店あまた並べる間を足早に過ぐ、赤前垂掛けたる白粉臭き女、『まあお休みやす』と頻りに勸むるを聞き捨てにして、とある小丘に上る、反魂子いきせきと後より來りて、『どうも君の足早には驚く、あるくよりは飛ぶ方だ』と惡口を叩く。傍の茶店に人の氣配なし、唯四十ばかりの丸髷、可愛らしき小娘と割籠開きて、折々桃の花指して笑ふを見受けたるのみなり。瞰下す

れば、眼前に池あり、池を隔てゝ畑あり、家あり、酒旗風に翻り、臥牛時に吼ゆ、其間、桃花あちこちに散點して、一幅のスケッチを爲す、丘を下り野道を辿りて、小石敷きつめたる大道に出づ、兩側の茶店に紅提灯數多く吊して、銀紙の切端をつけたるが、風にゆらめく、茶店の後に桃の花咲きほころびて、艶冶田舍娘の厚化粧したるに譬ゆるも、今更ながら古めかしとや云はむ、反魂子、頻りに後振向くを怪しと見れば、二八の美人、桃色の頰に化粧したるが下女を連れて來る、衣裳は何、髷は何、今更くだ〳〵しく云ふも冗なり、唯反魂子のすばやきをたゝへて止みなん。道を北すれば、未だ新らしき銅碑の立てるがあり石垣を打圍らして、あたり清められたり、こは高津宮趾の碑なりとぞ。道は此に轉く、踵をめぐらして、小丘に上り丘を下りて、田徑に出づ、望此に至て潤然。

見渡せば、萬頃の田園、一面に青疊を敷きつめて彼處に一團、此處に一塊、雲か、雪か、將た霞かあらず、是悉く桃花、一條の野水、銀色を湛えて流れ、青田茫々として漸く極れるところ、金剛、生駒の二山、天際に聳え、紫の霞淡く其麓を靄む、樂しいかな、吾も友も芳草を蓐として此景に見惚れ入りぬ、ぽか〳〵と暖き日影、天上に轉る雲雀、胸中の心炎全く滅じて、身も心も此儘ところけるやうになりたるとき、午砲の音に、幽靜の境を破られて夢さめたらんやうに起り上りぬ、反魂子頻りに眠げなるわれの顏を見て嘲り笑ふ。

桃山稻荷の境内に入る。奉納の神燈、何れも『新町何子』とか、なまめかしき名を列ねたるは、やがて狐の智恵に客を訛かさんとするにやあらむ、恐ろしとも恐ろし。

石階を上れば、洞穴あり、反魂子洞穴探檢を試みんとて中に入り、十分許して、額に皺を寄せながら、出て來る、『どうしたのだ』と問へば、『穴はぬけるとが出來ないから、舞ひ戻りした』と云ふ、見れは羽織は赤土に汚れて、黑の紋付を題なしにしてのけたり、是は僕を嘲つた罰だと云へば、反魂子苦笑しながら『どうか土を拂つて呉れ給へ』と今更ながら丁寧に云ふもおかし。

階を下り、赤鳥居を過ぎて、社後の人氣なきところに座を占む、三味の音、何處よりともなく洩れくる、春雨去と〳〵と降りて、桃の花、地に紅の雪を敷くらん、ゑめやかなる日に聞かば、いかにあはれなるべき。

桃山の眺め、大方は此に盡きたれば素來し途を辿る、野や山や水や、桃の綾に色どられて、怡々吾等を送るに似たり、反魂子の處自慢、終に處自慢に終らざりしを喜ぶ。

（完）

わか草　畢

明治三十三年五月廿三日印刷
明治三十三年五月廿五日發行

定價金拾八錢

編輯兼發行者　佐藤儀助　東京市神田錦町二丁目六番地
印刷者　山川傳之助　東京市芝區烏森町二番地
印刷所　廣布館　同所

不許複製

發行所　東京市神田區錦町二丁目六番地　新聲社

小島烏水君著

木蘭舟

近刊

扇頭小景以後の作を集めて『木蘭舟』と題す、書中『落花』『流水』の二に分ち、一は論文を、一は美文を收む。論文の奇警卓拔、美文の流麗瀟洒、共に一新特色を帶びて、他に求む可からざるもの。

新聲社出版書籍要目

青年機關 新聲

毎月一回十五日發行
定價金八錢郵税一錢
六ヶ月前金五拾錢
一ヶ年前金九拾六錢
但共に郵税共也

大改良を加へ面目一變せり

今の世青年雜誌と稱するもの極めて多し。而も其の內容を看れば、學術の講究を事として、滿紙乾燥無味の文字を以て埋め、宛然中學校の科外講義の如きもの、滔々として皆然り。此間に在りて青年の志氣の發揚を勉め、優雅高潔の趣味の涵養に盡くすものは只一の『新聲』あるのみ、『新聲』の出てしは、實に二十九年の夏にして、爾來歲を閱すること五、其間一日も改善進歩を怠ることなかりしも、時勢の推移と社會の現狀とに顧み、こゝに庚子の新歲と共に內容外形に大改良を加へ、面目全く一變するに至れり。曩に出でたる第一號は至る所稱賛の聲を以て滿ち、發行高從來に比して、六千部を增せり。尙ほ第二號(二月)は新に數名の記者を增聘し、更に數欄を加へ、益々材料の完美を期し、以て本誌の張主を發揚せんとす。謹んで江湖の深厚なる同情を待つ。

刷新後の新聲の特色

體裁 版面を擴張して四六二倍の大判となし、紙數を增加して七十頁以上となせり。全躰の文字十万以上、從來の五万内外なるに比して、全く倍余となれり

内容 此の如き多き紙面を充すに、精金美玉、片言雙辭尙ほ三誦の價あるものゝみを以てす。量に於けるが如く、質に於いて、亦大雜誌とはなれるなり。

設欄 『主張』は知名文士の時文の外、社中同人の評論を掲げ『人物』は趣味湧くが如き「文士月旦」と「文壇風聞記」の二を載す。其他評論あり美文韻文あり。

韻文 韻文界の寥々として振はざるを慨し今回青年詩人浦原有明氏を記者に聘し主として韻文の撰擇評論にあたらしむ。今後の本誌は斯壇の中堅たらん

投書 本誌は年少文士の共和國也、何等の情實なく何等の閥閲なし、只一特色あるものは歡んで之を迎ふ。今や誌面倍加、一に青年諸君の馳騁に任かす。

定價 斯くの如く、内容外形に大々的改良を加へて、其價從來に比して、加ふること僅に二錢。讀者希くは他の雜誌に比して、いかに其至廉なるかを知れ。

青年文士の投稿を歡迎す

東西文豪評傳

文學士 久保天隨君著

第一編 **柳宗元**

大判一冊 定價貳拾五錢
洋裝美本 郵稅金四錢

東西文豪評傳は、和漢英三文學史上の巨人を記傳し論評する者にして世界文學研究の基礎たらんとする者也。第一編『柳宗元』は少壯漢學家の巨擘久保の文學士の筆になる、觀察奇警、論斷妥當、而して文字雄健奔放、子が專門智識を傾倒して剩すなし。艶濃佻治の四六文を一掃して八代の衰を起し。其文は超諸雋邁、自ら清新の一路を拓開して他を蹈襲せず。其性は雋傑廉暢、識見常に天下の膽を破れる文界千古の巨人の全き面目を知らんと欲せば、正に本書に就いて一閲せよ。

本書は毎月又は隔月一回一冊を發行し、明春迄に全部十二冊を完結す可し

第二編以下刊行す可きものを擧くれは左の如し

續刊

第二 スコット 文學士 淺野馮虛
第三 湖畔詩人 文學士 戸澤姑射
第四 李太白 文學士 飯田龍泉
第五 紫式部 文學士 内海月杖
第六 曲亭馬琴 文學士 大町桂月
第七 韓退之 文學士 久保天隨

文學叢書

全部六冊　一部廿錢

毎月一回發行　郵稅各冊四錢

文學士　内海弘藏君著

三編

國文評釋

洋裝美本　定價二十錢

全一冊　郵稅四錢

曰く讀本、曰く註釋、曰く講義、これ等の書を以て滿たされたる我國文學界は、果して喜ぶべきものなる乎。あらゆる學術の日と進み、月と移るに反して、獨り此學のみ舊態依然、腐朽せる空氣のうちに躊躇して、何等の進歩を見る能はざるは、畢竟文字の末に走り、考證の迂に泥み、毫も批評的態度を以て研究せざれば也。我『評釋叢書』はこに『漢詩』『漢文』の二を出して、支那文學批評研究の端を啓きたり。『國文評釋』出でゝ、頑迷なる國文學界を覺醒するは、至當の次序に非ずや。著者内海氏は大學國文科出身の士、而も深く漢學に通じ、獨逸文學に造詣厚し、固より尋常の國文學者にあらざる也。此書は初學に解し易からしめんが爲に、大日本文章學會に於いて講じたる『方丈記』『徒然草』の二をとり來りて、之を訂し之を削り、更に數十頁を增補せるもの、主として作者の精神を發揮すると、趣味を啓發するとに向つて意を注ぎ、難解の字句を解し、文章の巧拙を議し、思想を論じて、亦一毫を剩さず。加ふるに評釋の文頗る出色、國語漢語を自在に驅使して趣味豊饒を極む、就中、時を傷み世を慨する章句の如き、よく其意を敷衍して、一語一句の間に無量の感慨を込めて餘情を曳たらしむ。近時の國文書中、斷じて他の追隨を許るさゝるものの也。

文學士　久保天隨君著

一編

漢詩評釋

一部廿錢　郵稅四錢

漢詩は東洋文學の大産物也、雄渾悽愴の氣格、高遠幽玄の趣味、他に比を求む可からざるものにして、二千年の長き、連續今日に至り、文星燦爛手を擧くれば捫するに堪へんとす亦盛ならずや。これを以て生命とする者は勿論、例令五字を列ね七字を並ぶるを欲せざる者と雖も、苟くも趣味を文字に有する者はこれが攻究を怠る可からず。これ我社が漢詩に於いて縱横の伎倆を有し、支那文學に於いて深邃の知識を蓄ふる久保先生に請ふて此書を出版する所也。

再版

文學士　久保天隨君著

二編

漢文評釋

定價廿錢　郵稅四錢

天隨氏曩に漢詩評釋の著あり、いかでか漢文の評釋なかる可けんや。蓋し支那文學を研究せんと欲せば、必ずや文と詩と相待たざる可からず。詩によりて支那文學史は陸離たる光彩ある如く、文によりて亦百段の價値ある也。本書は文想共に奇を極めたる老莊の二書につき變を極めたる其文を解し其辭を評し、其意を說き、其學を論じたるもの、觀察の緻密にして、論斷の痛快なるは、由來天隨子の最も得意とする所。此書出でゝ、蕪微不振の漢學界に、一道の正氣を與ふるを得可し。

文學士　坂本四方太君著

四編

俳文評釋

全一冊　定價二十錢

洋裝　郵稅四錢

國文漢文と對抗して大なる版圖を有するものは俳文也、現時の小說家の如き、其文多くは俳文の素に成れるもの、小說を草し美文に志ある人は必ずこれが研覈を積まざる可からず。蓋し其奇警にして酒脫なる、毛厘の微寸毫の小、描いて盡さゝるなきが如き、一字一句の未尙は趣味湧くが如き、到底國文漢文に求む可からざれば也。

青年文學叢書

全部六冊　毎月一回

第三編○新刊

美學大要

定價十錢　郵税二錢

美學は美なる理想を研覈するを以て目的となすもの、文學美術に志を抱ける人の一日缺く可からざる緊要の學科たるは論なし。本書は初學者の爲に草したるものにして、所説最も簡明、理義最も透徹、一讀よく斯學の本質を明にするを得可し。

第壹編

文學攻究法

文學士　久保天隨君序
米文學士　江藤桂華君著

定價十錢
郵税二錢

本書は多年歐米に留學して、東西の文學に精通せる米國文學士江藤專三氏の著述せる者にして、綱を文學の定義、文學攻究法、文學大綱、學校、攻究書籍、現時の文壇の七に分ち、丁寧周密に初學者の爲に指南の勞を執れるもの也

第貳編

美文作法

米文學士　江藤桂華君著

定價十錢
郵税二錢

韻文の拘束を脱して、縱横に天地の妙を謳ひ、自然の美を叙する美文の如きは、今の時に最も適應せる文躰に非ずや。本書は斯くの如き美文の作法を丁寧に説きたるの書、年少文學に志す人の寶典たると論なし。

青年文學叢書

江藤桂華君著

論文作法

定價拾錢　郵税貳錢

文章の要は筆を執つて世に立つ者のみならず、農工商都べての階級に通じて一日も缺く可からず、而して論文に於いて、殊に其急なるを見る。蓋し是れ自己の意見を發表し、主張を現はすものなれば也。本書は一卷悉く論文の作法を説きたるものにして、基礎を論理學と修辞學とに置き、得意の才筆を揮うて、懇切丁寧に之を指示したるもの也、青年諸君の机上、必ず一卷なかる可からず

江藤桂華君著

韻文作法

定價拾錢　郵税二錢

明治の文學史に特筆せざる可からざるものは、新躰詩の勃興也。從來の詩形の最も拘束せらるゝが如き弊なく、語調を七五にとりて千万言縱横に詩想を舒ふるを得、自然人事の美一として其絃に入らざるなし、これ豈青年文士の最も意を注く可きものに非ずや、只世間未だ之が作法を指示したるものなきを以て、人皆望洋の嘆を抱く、本書の出づるの已むなき所以也

第六編　青年と文學　續刊

文學士　大町桂月君著　（新刊）

文學小觀

全一冊洋裝　定價三十錢
中形頗美本　郵稅四錢

大町桂月遠く雲州簸川のほとりに隱れて、而も一言一行常に東都の文壇を騷がし、人爭うて其消息を聞かんとを希ふ。文界一代の花役者、子も亦才人なる哉。蓋し才は熱情眞摯今の文壇稀に看るの士、直言讜議、眼孔に映じ來るもの、快斷直に述へて字となす。飾らず、詐らず、飽く迄大膽に、飽く迄自由に、文學の爲め、常に其振興と刷新とに向つて、滿腔の精力を傾倒し盡くす。花の如き趣味多き文、こゝに於いてか生命あり、熱血あり、一誦人をして長く其名を忘るゝと能はざらしむ。文士の多くは勉めて子の批評に省るものは、之が爲めにあらずや。天下の青年の擧げて、子の文を讀むを喜ぶは之が爲にあらずや。一卷の「文學小觀」子の文學的論文を集め盡くせるもの、半生の心血注いでこゝに在り。春暢、夏鬱、秋肅、冬玲、あらゆる文の妙を極め、嶄新にして精緻、奇拔にして痛快、論亦嶄として他を拔く。眞個明治文壇の大產物、題して小觀といふもの、謙辭に過ぎざる也。

文學士　戸澤姑射君
文學士　久保天隨君合著
文學士　淺野馮虛君

中村不折君畫
下村爲山君畫

白露集（再版）

總クロース　定價參拾錢
洋裝頗美本　郵稅四錢

ろも觸れなば碎けん白玉のうちに清き涙をつゝみて天地の萬象をうつすものは露にあらずや。白露を以て名とせる此集は、やがて戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を、あらはして剩すなし。人生の運命を知らんとする者は此集を見よ、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繙け。若しろれ其文に至りては、誠に常代の絕品艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、渙然目を奪ふ。美文に志を寄する者の机上、殊に此集なかる可からず。寫眞銅版に刷して卷中に挿める不折爲山二子の畫は、雕肝鏤肝の餘に成りて、錦上花を添ふる者。

萬朝報評

大學出身の文士姑射、天隨、馮虛三子の小品文を集めたるものなり、姑射の想は神秘に興を發し、天隨の文は稜爽の氣を帶び馮虛の詞は切々の情禁しかたき者あり。姑射の文五篇、尼寺の鐘、獄屋の月富士見地藏、殊に讀むべし。天隨の文三篇、大鳴門の眺、雨韻川源の一夜、蝦夷嵐の中、前二者は壯涼沈痛にして、棄て難きの味あり。例へば大鳴門のなかめの一節「まゝとに瀨戸海の潮の息たゝ半里の喉元にせまりてあへぐなれば云々の如きは、即ち是也。馮虛の文三篇、血くもり、谷川の水、吹雪の中、三篇共に軒輊あるを見す。皆詩的にして人情の秘に觸る。蓋し姑射は好んで心機の變を描かんとし、天隨は人間悲愴の消息を傳へんとし、馮虛は果敢なき運命を觀ぜんとするものならん。讀んで聊か飽き足らざるの感なきに非るも、餘韻の嫋々たるを寧ろ此の輯の長所とせむ。

河東碧梧桐君著（三版發賣）

俳句評釋

全一冊 定價郵稅共
頗美本 金貳拾錢

俳句を作るもの甚だ多きも俳句を解釋して、その趣味を知らしむるものは、殆んどあるなし。此著は新派の河東碧梧桐氏が、元祿俳句の粹をぬきたる猿簑の中、名吟と稱せらるゝ者百七八十句を選び、審美的標準に據り、其の趣味文法言語まで詳しく評し、細かに釋きたるものにして、文章極めて平易なれば、俳句を研究せんとする者の一讀すべき好著なり（靜岡民友新聞評）

河東碧梧桐君著（再版發賣）

續俳句評釋

全一冊 定價郵稅共
洋裝美本 金貳拾錢

『俳句評釋』の一卷を公にするや、初學の士趨走して是を求め、一版二版忽ち盡きて三版を發市するに至れり。著者江湖囑望の厚きに激し、勵精更に筆を續卷に執り正編に洩れたる秋春の二季を評釋し、以て完璧缺くるなきものとなす。其評論の嚴正にして痛快なる、實に快刀一閃、亂麻を斷つの趣あり。試に讀一過せば其俳句を鑑識する上に於て、其作法の妙機を知る上に於て、少からざる益を得べし。

大町文學士序
笹川文學士序
田岡嶺雲君著

嶺雲搖曳

増訂 定價貳拾錢
五版 郵稅四錢

田岡嶺雲子、滿腔悲憤の氣抑ゆる能はず、一管の毛錐に托して、今の文壇と社會とを罵殺し盡くす。一卷の『嶺雲搖曳』眞個腐朽せる社會の興奮劑也、混沌たる文壇の斬魔劍也。宜なる哉刻成りて世に出づるや、五千部旬日にしてつき、再版參版四版亦忽ちにして、市に絶ちしとを。今こゝに第五版を發市して青年諸子に頒つ。

田岡嶺雲君著

第二嶺雲搖曳

全一冊 定價貳拾錢
洋裝 郵稅四錢

嶺雲子が筆を文學宗教人物等の各方面に向けて、胸中鬱勃の磊塊を吐きたるものを集め、此第二嶺雲搖曳を編す。第一編の短文斷章の多きに反して、これは雄篇大作を以て、其大半を埋む。彼には滿岩に激して白沫空に躍るの狀を見る可く、こゝには長江洋々萬里に亘りて、兩岸の風光目睹するに堪へざるの觀あり。

田山花袋君著（參版）

ふる郷

全一冊 定價廿錢
洋裝美本 郵稅四錢

ふる郷は好箇の題目なり、ふる郷は人生に於ける最も清く最も美しき舞臺なり。ふる郷は人間が最後に至るまでの長き追懷なり、著者今詩的幽艶の筆を揮つて、芦荻風にろよげる沼と、殘濠水枯れたる古城趾と、雲影低く垂れたる平原とを有せる追懷の情深きそのなつかしきふる郷を寫す、去かも著者の之れを寫すや、半は正面より半は側面よりし、奇正縱横殆ど端睨す可からざるの概あり、正に是明治文壇有數の佳作。

春風秋聲

桂月、晩翠、嶺雲、臨風、鐵幹、花袋等の諸名流の作に、青年文士の筆に成る佳作數十篇を合せ、卷末新聲社同人の美文を添へたるもの、明治文壇の粹は爰につくといふも過言に非ざる可し。中村不折子の春風秋聲の畫は、錦上更に花を添へて數段の價値を加ふ、青年文を學ぶ人の坐右の寶典也

定價廿錢 郵稅四錢

雅正軒詩話

大沼鶴林先生著

天下の詩宗大沼枕山先生の學を繼で、詩名一代に高き鶴林先生が、漢詩に關する卓拔の説、嶄新の議とを一卷のうちに收めたるもの也。其内容の如何なる價値あるかは、諸新聞雜誌の筆を揃へて、賞賞の辭を吝しまざりしにて知るを得可し。

定價郵稅共八錢

小島烏水君著

扇頭小景

增訂 定價貳拾錢
三版 郵稅四錢

本書は青年文壇に嘖々の名ある小島烏水君か自然の美を謳ひて長虹の氣を吐ける者收むる所の美文、皆苦吟縷琢の餘に成りて、艶麗、瀟洒、豪岩の美、共に一卷のうちに在り。刻成りて世に出づるや、江湖の視線一に此書に集り、初版旬日にして盡きしを以て著者に屬するに嚴密なる校訂と、新作の增加とを以てし、再版を發售せしに亦忽にしつく。今回更に增訂三版を公にして文事に志を寄する青年諸君の伴侶とす

妖堂居士著（三版）

文壇風聞記

全一冊 定價拾五錢
洋裝 郵稅二錢

菊五郎敦盛に扮す、紅顏幼態、眞個三五の少年。而してこれを樂屋に窺へば、白髮皺面の一老爺のみ、文壇風聞記は文壇樂屋觀也。小説家、評論家、新聞記者等百餘の文士を捉へ來りて、其冠を去り、其衣を除き、赤裸々の面目を紙上にあらはす。蓋し其文を讀んで其人を想ひ、其人を想うて其風采を知り、逸話を知り、性情を知らんとするは一般の常とする所、此書は即ち讀書社會の渴望を滿たさんが爲に出でたる也。

鏡花風葉花袋三君著

花吹雪

定價廿五錢　郵税四錢

洋裝美本　全一冊

新聲社編

清籟清韻

定價郵税共六錢五厘

洋裝　全一冊

新聲記者編纂

紅葉舟

瀧まくら……大町桂月
穿雲記……戸澤姑射
金曜日の述懷……島崎藤村
翠虹萬丈……久保天隨
荒磯物語……江見水蔭
冬こもり……小杉天外
おぼろ影……淺野馮虛
京の紅葉……河東碧梧桐
大雄山紀行……内海月杖
吟風咳唾……大沼鶴林
秋の聲……小嶋烏水
虫の音……金子薫園
ふかげ草……河井酔茗
天神橋……中村春雨
青燈可親……葉末露子
寒籟餘韻……堀井汀水
片破貝……田口掬汀
林中の少女……藤島愛泉
箕面山の秋……高須梅溪
散る花……西村酔夢

全一冊　大判美本　定價郵税共拾三錢

新聲記者編

若葉集

定價廿錢　郵税二錢

全一冊　美本

新聲社編

新聲第二編

定價三十錢　郵税八錢

合本

新聲記者編（新刊）

月桂冠

全一冊　定價郵税共
大判美本　金拾錢

我社は本年一月賞を懸けて、江湖に小説、美文、韻文、論文を募集するや、集る者實に六百餘篇の多きに及べり。皆是青年文士が苦心經營の餘に成りしもの。中に選に當りて、月桂冠を頂けるもの、如き、文想嶄として秀出、知名の作家をして、後に瞠若たらしむるものあり。蓋し本書は我青年文壇の特色と、眞價と、位置とを名殘りなく發揮し得たるを信ず。附錄には久保文學士の『豆州名勝』泣菫の『村醪』有明の『彩雲』等の傑作を掲ぐ。

本社は主として青年文士の師友たる可き書籍を發刊す

注文は都て前金とす、爲替は『神田錦町』に振込まる可し。切手代用はなる可く避けられたし、途中にて紛失するも取調ふる道なく、相互に於いて失ふ所多ければ也。已むなき場合は三錢以下の切手にて一割を増さる可し。

發行所　東京神田錦町二丁目六番地　**新聲社**

第二學期生徒募集◎ 細則申込次第進呈

大日本文章學會

作文通信教授

本會を開きて既に一年を經たり、其間に於て作文通信教授の上に得たる所敢へて少なしとせず。此經驗に基き本年一月即ち第二學期よりは、全躰に大改良を加へ、新に講師を聘し學科を増し以て完全なる文章講義錄たらしむるを誓ひ、短日月間に文章を練熟せしめんとを期す。今や新舊學期變更の際に在り、入學には極めて便なれば、有志者は至急申込まる可し。

學科 國文評釋、漢文評釋、和歌評釋、漢詩評釋、日本文典、日本文章史、審美學、修辭學、日本文人傳、漢文法一斑、名家文範、日本文學史、文章作法、文章漫話、美辭類纂、熟語釋義、故事解說、

略則 文章の溫與を極めんとする人の爲に設く、修了一ヶ年、月講義錄二回を（大判八十頁以上）を頒つ○束脩三十錢、月謝廿五錢、半ヶ年一圓六十二錢、文章は無料にて添削の需に應ず

東京市神田區錦町二丁目六番地 大日本文章學會